

會 務

第 20 卷 第 12 號 昭和 9 年 12 月

役 員 會

第 11 回 役員會

開催日 昭和 9 年 11 月 19 日

出席者 會長 久保田敬一君
 副會長 米元晋一君 草間 偉君
 前會長 中川吉造君 那波光雄君 名井九介君
 常議員 衣斐清香君 内海清温君 神原信一郎君 鈴木雅次君
 常議員兼主事 古川淳三君 同兼主計 佐藤利恭君
 同編輯長 田中 豊君

決議並に報告事項

決 議

1. 20 周年記念廣告募集に關する件

主として東京市及同附近に於ける會社 39 社に對し役員各自分擔の上勸誘することとせり。

2. 次回の役員會は日程を繰上げ 12 月 10 日 (月曜日) 開催することとせり。

3. 入退會の件

穴澤藤作君外 4 名を會員に有田虎雄君外 45 名を准員に阿武茂君外 38 名を學生員に日本鐵扉製作所代表社員小島重吉君を特別會員として入會を承認せり。會員高野代次君及び富田傳吾君は死亡せり。

報 告

4. 20 周年記念事業關係委員其の他に對する謝禮に關し報告をせり。

第 21 回 視 察 旅 行

視察場所 富士五湖並に國立公園箱根

日 時 昭和 9 年 11 月 18 日

參加者 28 名

行 程 自動車にて午前 8 時東京驛前を出發 8 號國道及び猿橋を視察し河口湖、山中湖、長尾峠を経て箱根に到り懇親會を開き午後 7 時箱根を出發し午後 10 時東京驛前着解散せり。

そ の 他 の 記 事

○昭和 9 年 11 月 24 日土木學會誌第 20 卷 11 號發行成規の手續を了し 11 月 25 日これを全會員に配布せり。

○昭和 9 年 11 月 19 日までに於て下記諸君を入會の手續を了し名簿に登録せり。

入 會 特 別 會 員

日本鐵扉製作所代表社員 小島重吉君

入 會 々 員

| | | | |
|-------|--------|-----------|-------|
| 穴澤藤作君 | 折坂理五郎君 | 佐久間七郎左衛門君 | 橋本爲作君 |
| 村松岩一君 | | | |

入 會 准 員

| | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| 有田虎雄君 | 飯田正毅君 | 白井美世志君 | 遠藤秀友君 |
| 大澤知治君 | 岡本東一郎君 | 加藤得一君 | 河村重俊君 |
| 金崎九州男君 | 北松一郎君 | 岸本潔行君 | 後藤馨君 |
| 佐伯政雄君 | 佐久間浩君 | 篠崎龍君 | 菅原光雄君 |
| 杉丸武君 | 高見清君 | 高橋與三郎君 | 大橋耕平君 |
| 津島秀雄君 | 土肥信義君 | 富井正信君 | 長坂四郎君 |
| 早川淳一君 | 樋口保三郎君 | 藤井啓一君 | 福岡慶一君 |
| 洞山規矩男君 | 松見三郎君 | 滿野辰男君 | 湯淺四郎君 |
| 吉井隆君 | 吉田吉秋君 | 有本欣二君 | 奥山才次郎君 |
| 阿武茂君 | 天野保壽君 | 泉本正人君 | 井中久幸君 |
| 井上忠熊君 | 稻葉壽一郎君 | 上野庄三君 | 内田壽雄君 |
| 大森美忠君 | 門屋新一君 | | |

入 會 學 生 員

| | | | |
|---------|-------|--------|--------|
| 風戸薫君 | 河合宏美君 | 北御門義彦君 | 齋藤孝三郎君 |
| 佐々木精一郎君 | 柴垣清司君 | 東海林正男君 | 鈴木佐雄君 |
| 鷹取政二君 | 瀬戸豊君 | 高野邦彦君 | 田代福一君 |
| 多田正夫君 | 高橋俊吉君 | 津川清君 | 出水義也君 |
| 外山晃君 | 野田勝美君 | 繩田準六君 | 板東譽富君 |
| 平山實美君 | 福家千助君 | 堀合信男君 | 牧田市衛門君 |
| 松岡茂喜君 | 三宅次郎君 | 森全光君 | 森勇造君 |
| 矢島順吉君 | 山田久雄君 | 山田正男君 | 山田貞賢君 |
| 吉戸長六君 | 吉山正夫君 | 吉村正君 | 渡邊數夫君 |
| 小川彌一郎君 | 岡田正藏君 | 岡村貞男君 | |

○昭和9年11月中に於て寄贈又は交換を受けたる雑誌下記の如し

| | | | |
|--------------------------|------------------|-----------------------|------------|
| 工業現勢 第3巻第11號 | 東京工業大學工業調査部 | Engineer 第6巻第11號 | 日本鑄物協會 |
| 噪音單位及噪音計 昭和9年10月 | 電氣協會關東支部 | 電氣學會雜誌 第54巻第11冊 第556號 | 電氣學會 |
| 營繕管財局營繕事業年報 (大正14年度) 第1輯 | 營繕管財局 | 學術部事業報告 昭和8年,9年前期 | 日本學術振興會學術部 |
| 研究報告 Vol. XIV. No. 1 | 八幡製鐵所 | 日本建築士 第15巻第5號11月 | 日本建築士會 |
| 研究事項報告目録 昭和8年度 | 八幡製鐵所研究所 | 帝國學士院記事 第7巻第8號 | 帝國學士院會 |
| セメント界彙報 第320號 | 日本ポルトランド・セメント同業會 | 朝鮮の陶器 第55回講演集 | 啓明會 |
| 日本標準規格 (縮版) 第8輯 | 商工省工業品規格統一調査會 | 都市問題 第19巻第5號 | 東京市政調査會 |
| 九州帝國大學工學彙報 第9巻4號 | 九州帝國大學工學部 | 工政 175號 | 工政會 |
| 下水道及び汚水處理法 第4巻 | コ ロ ナ 社 | 都市計畫に於ける最近の進歩 第3巻 | コ ロ ナ 社 |
| | | 計量界 271 | 日本度量衡協會 |
| | | 鐵道技術 第8巻12號 | 鐵道技術社 |
| | | 資 源 第4巻第7號 | 資 源 局 |

| | | | | | |
|------------------------|-------------|------------|---------------------|-------------|-------------------|
| 鑄物 | 第6卷第11號 | 日本鑄物協會誌 | 土木試驗所報告 | 第28號昭和9年第3册 | 內務省土木試驗所 |
| 橫濱港と其修築 | | 內務省橫濱土木出張所 | 造園雜誌 | 第1卷第3號 | 日本造園學會 |
| 建築と社會 | 第17輯第13號 | 日本建築協會 | 日本鑛業會誌 | 第50卷第595號 | 日本鑛業會 |
| 建築雜誌 | 第48輯第591號 | 建築學會 | 水道協會雜誌 | 第19號 | 水道協會 |
| 主要建築材料價格並指數表, 職工勞銀並指數表 | | 建築業協會 | 工學院同窓會誌 | 第36卷第12號 | 工學院同窓會 |
| Ingar 10 | | | セメントコンクリート道路 | No. 26, 27 | 日本ポルトランドセメント同業會 |
| Romazi sekai | | 日本ノローマ字社 | 鐵と鋼 | 第20年第11號 | 日本鐵鋼協會 |
| セメント工業 | 昭和9年12月 | セメント工業社 | 日本ポルトランド・セメント業技術會報告 | 第22號昭和9年4月 | 日本ポルトランド・セメント業技術會 |
| 帝國鐵道協會會報 | 第35卷第11號 | 帝國鐵道協會 | G. S. news | 第8卷11月 | 日本電池株式會社 |
| 造船協會會報 | 第54號 | 造船協會 | 滿洲電氣協會 | 第27.昭和9年11月 | 滿洲電氣協會 |
| 日立評論 | 第17卷第11號 | 日立評論社 | 信 號 | 第7卷第6號 | 信 號 會 |
| 造船協會雜誌 | 第111號 | 造船協會 | 會務彙報 | 第36號 | 日本建築請負業聯合會 |
| 業務研究資料 | 第22卷第38,39號 | 鐵道大臣官房研究所 | 業務研究資料 | 第22卷40, 41號 | 鐵道大臣官房研究所 |

會 告

本號登載の講演に對しては時間の關係上質疑應答を
書面によつて御願ひすることに致しましたので御質
疑又は御討議のある方は奮つて御寄稿を願ひます。

土 木 學 會

創立 20 周年祝賀會を終りて

會長 工學博士 久保田 敬一

土木學會は大正 3 年 9 月 15 日に發起人總會を開き、同 11 月 24 日文部大臣より設立許可を受け、同 12 月 9 日法人設立登記を済ませたのであるから、何れにしても昭和 9 年の秋は創立 20 周年に當るのである。

土木學會の傳統的モットーは“量より質”であり、又“外觀より内容”である、従て 10 周年にも、15 周年にも記念とか祝賀とかの意味の催はなかつたのである。此の傳統的モットーは本學會として決して變改すべきものでなく、學會の續く限り固守すべきものであると思ふが、然し“量よりは質”、“外觀よりは内容”であつて、内容の整つたときは之れに相應する外觀も必要であるし、質が良ければ量の多いことは最も望ましい事である。創立當時の目標が奈邊に在つたにせよ、又創立者の考へが如何であつたにせよ、それ以來已に 20 年の歳月を経、當時 380 余名の會員數が 4300 名に達した今日から見れば、如何に質を重んじ、内容を貴ぶ本會としても舊態其の儘を以て満足することが出來ぬのは當然である。況や其の間に於て四圍の狀勢が變化し、殊に本學會と最も密接の關係にある土木工學及び土木技術が 20 年前に比し殆ど隔世の感ある今日に於ては“土木學會を何んとかせねばならぬ”と云ふ考の起るのは必然的である。

昭和 8 年の初めに本學會振興に關する委員會が設置せられ、4 箇月を費して學會振興策を講究審議せられたのも、此の“何んとかせねばならぬ”の一つの表現である。此の委員會の決定した振興策には種々の項目が列記せられてあるが、其の内 20 周年祝賀會に直接關係あるのは“事業基金の募集”の項に“本會の創立 20 周年を迎ふるに當り記念事業基金を募集すること”とあり、又“土木會館の建設”の項に“本會の設備を充實し其の機能を十分に發揮する爲、會館建設は必要缺くべからざるを以てこれが資金募集及び建設方法等を具體的に研究し其の實現を計ること”とある 2 項目である。

此の振興策より觀ても 20 周年を迎ふる機會に於て記念事業なり、祝賀會なりを舉行し、從來の稍退嬰的なりし氣分を幾分なりとも進取的に轉換せしめんとする要請があることを知るのである。20 年間雌伏して内容充實に力めた土木學會が相當の量と外觀を具備して漸く雄飛の姿勢に移らんとする機運を作る爲にも 20 周年を記念し又祝賀する或種の計畫をなすことは必要であつたのである。

昨年 5 月に本學會創立 20 周年記念委員會が設置せられたのであるが、同委員會に於

ては 20 周年を記念するには先づ土木會館を建設するに在りとし、特に其の爲に小委員を擧げて會館建設の計畫を考究せしめ、會館を新に建設することや、既設の建物を買収又は借入れて會館に充つる案を立てたが、費用の關係とか其の他各種の事情の爲に其の實現を見るに至らず、終に差當り學會の事務所をユニオン館に移して之れを擴張し、將來會館建設に進む第一歩とすることに決定したのである。

扱愈々本年に入り 20 周年を迎へて見ると單に會館の移轉擴張だけでは物足らず、大に意義ある記念事業を行ふではないかと云ふ聲が異口同音に叫ばれたので、種々考究の結果 20 周年記念事業としては記念出版と祝賀會の 2 つを遂行することとなり、記念出版としては土木工學論文抄録、土木學會史及び土木學會誌記念號を編纂することとし、祝賀會は 10 月 26、27、28 日に開催し宴會、講演會及び見學會を催すこととなつた。

出版物即ち土木工學論文抄録及び土木學會史の出來榮の見事であつたこと、祝賀會が豫想以上の盛會であつたこと等は茲に贅言を費す迄もなく諸君の既に御承知の事であつて、今回の 20 周年記念事業は——其の内未だ完成せざるものも多少あるが——先づ大成功であつたと云つて差支ないと思ふ。

10 月 24 日に 20 周年祝賀會の前振れの様な意味で東京中央放送局から全國中繼ラジオで會長講演を行つたが、其の筋の取締規則があつて土木學會の宣傳をやつてはならぬと云ふので、少からず頭を悩ました結果規則に牴觸せぬ範圍で土木學會の關係にも言及したが、祝賀會の前振れと云ふ迄の程度に至らず頗る不徹底のものであつて自分乍ら會員諸君に申譯ないと思つて居る、殆ど同時に行はれた都市問題會議などは堂々とラジオのニュースで其の會議の有様迄も放送せられて居つたのに較べて甚だ遺憾であつた。

扱 20 周年祝賀會を無事に成功裡に終て其の跡を顧みると色々の所感がある。

第 1 に感じたのは創立以來 20 年間に蓄へられた土木學會の實力である、他の學會の如く華々しき行動をせず、10 周年、15 周年にも祝賀らしき催もせず、良質の會員と、他の追從を許さざる會誌の内容とを唯一の武器として 20 周年を迎ふる今日迄、黙々として牛の如く堅實なる歩みをなし、或時は“土木學會眠れるに非ずや”との非難を受けても之れを顧みずして根本の培養に力められたる先輩の遠見は誠に敬服に値するものがある。此の基礎の上こそ如何なる大建築も易々として建てらるゝのであつて、今回の 20 周年記念事業の成功も源は此處にあるのであるとの感は最も深かつた、特に力強く思はれたのは會員の一絲亂れざる結束である、既に祝賀會の席上でも御披露した通り、記念事業の準備には殆ど會員總動員の有様で役員は申すに及ばず、多數の會員が準備委員として活動せられ、又曩に振興策により依囑せられた多數の地方委員の方も多大の努力を

吝まれなかつた、特に前會長の方々が吾が事の様に思つて、或は委員長となつて盡力せられ、或は各種の打合會に出席せられて忠言を與へ鞭撻せられ後輩の吾々をして思はず奮起せしめた程の熱心さであつたことは本會ならでは見られざる情景であつて、誠に美しく思はれた。

記念出版及び祝賀會を透して觀た土木學會は吾々自身も今日迄想像しなかつた位“心強い”ものであつた、論文抄録は近頃に於ける驚異的出版物である、僅か半年位の短日月によくも之れ丈け集められたものと驚く外はない、今後毎年之れを補遺修正して行つたならば頗る利用範圍の大なる參考書となるであらう、講演會は 32 の——何れも重要な主題に對する——講演を 2 日間の午前中のみを以て充てたのであるから、1 講演者に對し 12 分と云ふ極度の短時間で講演者に對しては誠に御氣の毒に堪へなかつた。然し講演其の者も立派で有益であつたのみならず、此の講演によつて吾人の同時代の土木技術者が殆ど劃時代的大事業をなすつゝあるのを知つて頗る心強く感じたのである。之れ等の講演は本記念號に登載された通りであるが、講演者及び演題の選擇の宜しきを得たのと相俟つて近頃に無い立派な講演會であつたと信ずる。

祝賀宴會及び見學會は何と云つても其の成否は人の頭數の函數である、平素の晚餐會等の成績から見て頗る危虞の念に堪へなかつたのと反對に每會非常な盛會で、見學會等は少々人數が多過ぎて困ると主務の委員がこぼした程で、此處にも會員が結束して祝賀會を盛大ならしめた一斑が窺はれる。

斯の如くにして祝賀會も無事に終了し、記念事業も大成功を收めたが、前述の通り此の記念事業なり祝賀會なりが土木學會の氣分轉換の 1 pivot となるならば、祝賀會の祝盃より醒めたる吾々は直ちに土木學會の將來に向て眼を轉じ、“量より質”“外觀より内容”を忠實に守りつゝ土木學會をして其の存在を大いに意義あるものにし、吾人の天職である土木工學及び土木技術を以て御奉公するに最も都合よき機關となすことを目標として邁進すべきであると思ふ。

會 報

第 20 卷 第 12 號 昭和 9 年 12 月

土木學會創立 20 周年記念に関する記事

土木工學論文抄録の發刊

創立 20 周年記念事業の一として土木工學論文抄録を發刊することを畫し、昭和 9 年 4 月その編纂委員會が設置された。その後數回委員主査會を開いたがその模様はその都度會務會報に詳しく記したから茲に再録しない。この抄録は主として大正昭和年間に於ける我國の土木工學に関する文獻を網羅しこれを部門別に分類して抄録したもので委員會設置以來僅々 7 箇月の短時日を以てこれが發刊を見、祝賀會當日及び講演會の席上に於て來會諸君の高覽に供しその後全會員に配布し得た。これは一つに會員諸君の熱心なる後援と委員長中川吉造博士を始め委員諸君の特別なる努力に依る所である。茲に本會は關係各位に對し深甚の謝意を表する次第である。

土木學會略史の發刊

創立 20 周年記念事業の一として土木學會史を編纂することになり昭和 9 年 4 月その編纂委員會が設置せられた。此の略史は創立當時の事情を明かにし本會が行つた種々の事業を輯録したもので本會發展の道程を充分窺知し得べき有益なる史料である。これを祝賀會當日並に講演會の席上に於て來會せる諸君に贈呈したのであるが本會誌に之を再録することとした。茲に本會は編纂に當られたる委員長名井九介博士を始め委員諸君の熱心なる努力に對し深甚の謝意を表する次第である。

職員表彰式

土木學會創立 20 周年記念として 10 年以上勤績の下記諸君を表彰することになり昭和 9 年 10 月 22 日午後時より本會集會室に於て表彰式を舉行し表彰狀の授與並に記念品を贈呈し、終つて帝國鐵道協會に於て 6 氏を招待し晚餐會を開催した。

| | |
|-------------|---------|
| 19 年勤績 | 北村嘉太郎君 |
| 12 年 10 月勤績 | 山岸倉藏君 |
| 11 年 9 月勤績 | 鬼海治三郎君 |
| 11 年 1 月勤績 | 石川元治君 |
| 10 年 11 月勤績 | 田淵義作君 |
| 10 年 8 月勤績 | 海老澤昇次郎君 |
| | 以上 |

會長ラチオ講演

本會々長久保田敬一君が創立 20 周年記念祝賀會に先だち 10 月 24 日午後 3 時半よりラジオで“國民生活よ

り觀たる土木學”の演題の下に土木學が吾々の日常生活に如何に重要であるかと言ふことに就いて一般國民に呼び掛けられた。その内容は會長講演欄に記述した通りである。

記 念 祝 賀 會

土木學會創立 20 周年記念大會の第 1 日として昭和 9 年 10 月 26 日上野精養軒に於て記念祝賀會を開催した。受付開始は午後 4 時であつたが出席會員諸君は開始前より續々と詰めかけられ受付子も暫し應接に邊なき状態であつたが 4 時 30 分より餘興が開始されたので會場は和やかな氣分に浸された。餘興は松旭齋天洋の奇術と一龍齋貞山の講談とであつた。

開會前に既にあの廣い會場も立錫の餘地なき迄に參會せられたことは全く土木學會創立以來空前のことであつて本會の隆昌を物語る一つの證と云ふべきであらう。

定刻午後 5 時 30 分に至るや司會者祝賀委員長眞田秀吉君が開會を宣し茲に本會 20 周年記念大會の幕が切り落されたのである。

次で本會々長久保田敬一君より次の如き式辭を述べ續いて來賓各位の祝辭が朗讀せられた。

祝 賀 會 に 於 ける 會 長 挨拶

閣下並に諸君。

今夕土木學會の創立 20 周年祝賀會を開催するに當りまして、内閣總理大臣閣下を初め多數來賓各位が御繁用中特に御來臨を賜はりましたことは本會の最も光榮とする所であります。又會員各位に於ても遠近各地から御繰合せ御來會下さいまして此の意義ある會合を一段と盛大にせられた事は感謝に堪へません。

本會は本邦土木學界に於ける唯一の綜合的學術團體でありまして、大正 3 年創立以來茲に 20 年を迎へたのであります。今日では會員の數 4300 名に達し全國各方面土木技術者の殆ど總てを網羅する盛況に達したのであります。

斯くの如く本會が今日の隆昌を見るに到りましたことは、歴代の會長初め全會員の努力によるとは申せ一面に於て、關係各位の御援助に負ふ所が大であります。此の機會に於きまして、本會を代表して深く感謝の意を表したいと存じます。尙本會の過去に於ける歴代の會長は何れも本邦土木學界に於ける重鎮で本會の爲には殆ど獻身的に盡力せられ本會が今日の隆盛を見ましたのも其力に負ふ所が多いのであります。既に故人になられ今日此の慶びを共にすることの出來ない方も少なくないのは私共の裏心より遺憾とする所であります。依つて此の際既に物故せられたる歴代の會長の芳名を御披露致し會員諸君と共に謹で敬意を表したいと思ひます。

| | |
|---------------|---------------------|
| 第 1 回 (創立當時の) | 故 工學博士 男爵 古 市 公 威君 |
| 第 2 回 | 故 工學博士 古 沖 野 忠 雄君 |
| 第 4 回 | 故 工學博士 石 黒 五 十 二君 |
| 第 5 回 | 故 工學博士 白 石 直 治君 |
| 第 6 回 | 故 工學博士 廣 井 勇君 |
| 第 7 回 | 故 工學博士 仙 石 貢君 |
| 第 10 回 | 故 工學博士 中 原 貞 三 郎君 |
| 第 12 回 | 故 工學博士 中 島 銳 治君 |
| 第 13 回 | 故 工學博士 日 下 部 辨 二 郎君 |
| 第 14 回 | 故 工學博士 吉 村 長 策君 |
| 第 15 回 | 故 工學博士 市 瀬 恭 次 郎君 |

土木工學は御承知の通り人類の福利増進に寄與すべき工學の一大分科でありまして、其の専門とします所も、治水、港灣、鐵道、道路、橋梁、上下水道、發電水力、都市計畫、砂防、灌漑、排水等國民の利用厚生、一國の資源開發、文化の向上に極めて重要なものでありまして、特に交通に關する工學の分野は國防上にも至大の關係を有するものであります。

今や土木工學の進歩は、他の工學の分科と同様に、分業的研究によつて其の進歩の著しきものがありまして、各技術者は其の思ふ所に従つて各其の技能の啓發に努力して居る次第であります。又一面に於て吾々は特に土木工學に關する綜合的の知識の涵養を怠ることが出来ないのであります。

本學會は即ち、土木工學の分業的並に綜合的進歩、發達を計ることを大きな目的として居るのであります。

本會は創立以來引續き學會誌を發刊して會員の研究論文及會員の關與せる工事報告等を發表し、一般會員も亦熱心に之等に對し討議研究を致して居ります。又時々、學術講演會、見學會並に視察旅行等を行ひ見聞を廣め且つ會員の親睦を計つて居ります。尙各種の調査會を起し本邦工學界に寄與したことが尠くないのであります。就中

關東地方の震害調査、東京市の高速鐵道調査、

コンクリート調査、用語調査、維新以前日本土木史編纂、

創立 20 周年記念事業としての土木工學論文抄録の發刊、

等は其の顯著なるものであります。

今日我國の現状を土木工學の見地より靜觀致しますに、其の爲すべき事業の甚だ多きを痛感する次第であります。特に本邦及隣邦滿洲國に於ける治水及交通問題、都市問題、衛生工學的の問題等に於きまして、其の建設改良を要すべきものが少くないのであります。

我々は固より我々の任務が國力の消長に重大なる關係のあることを自覺し、誠實に其

の任務の遂行に努力せんとして居るものでありますが、其の遂行に當りましては國民の充分なる理解と關係各方面の方々の熱誠なる御援助によるに非ざれば、其の目的を達成することは極めて困難であると考へるのであります。

私は此の機會に於きまして、特に本會の使命の今後益々重大なるを思ひ、會員が一致協力して土木報國の實を擧ぐる決心であることを御披露申上ると同時に、御來臨の來賓各位に對し土木工學及土木學會の使命に對する充分なる御理解を以て御援助と御鞭撻を賜はらん事を御願ひする次第であります。

これを以て御挨拶と致します。

内閣總理大臣祝辭

本日は我國各方面の土木技術者を網羅して居る土木學會が其の創立 20 周年を記念する祝賀會を開催されるに當り御參集の本邦土木工學界の權威各位に對し御祝辭を申述べますことは誠に欣幸に存ずる所で御座います。

土木工學は國民の利用厚生國家資源の開發に最も直接なる要因でありますことは改めて申上げる迄もないのでありまして我國文化が比較的短日月の間に今日の高度に達しましたことにつきましては土木工學の功績に歸すべきもの甚だ大なのであります従つて本土木學會の偉績も亦銘記すべきものがあるのでありまして私は此の機會に於て各位に對し衷心敬意を表する次第で御座います。

今後我國は各方面に尙大に飛躍しなければならないのでありますが土木工學の方面に於て爲すべき事業は殊に甚だ多いのであります又滿洲帝國の成立に依つて各位の實地に活躍せらるべき地域が著しく擴張せられたのであります、私は此機會に於きまして各位が今後更に一層研鑽努力せられんことを切望して已まないであります。

右感想の一端を申上げて御祝辭と致します

昭和 9 年 10 月 26 日

内閣總理大臣 岡 田 啓 介

内閣總理大臣代理として秘書官福田耕氏朗讀せらる。

内務大臣祝辭

茲に土木學會創立 20 周年記念大會を開催せらる獨り我土木工學界のみならず廣く國際學界の爲洵に欣幸に堪えざる所なり。

顧みるに明治維新の初盛に海外の文物制度を輸入し國內産業の振興を圖るの時土木工學は尙多く他の顧みる所とならず明治の中葉に於ける治水、鐵道、水道等の大事業が外國

技師の手に依つて其の完成を見たるもの多かりしことは今尙記憶に新なる所なり。

然るに苦心研鑽の結果著々成果を収め曩に萬國工業大會の我邦に開催せらるるや我工學界の異常なる發展は一躍して國際間に承認せられ世界各國の注視を惹くに至れるが如き固より國民多年の努力に外ならずと雖本學會の調査研究に負ふ所亦極めて大なるものあるを疑はず。

念ふに今後國力の充實發展は科學の發達に俟つ所頗る多く土木工學の如き益々研鑽の必要を認めらるゝの秋本會の如き權威ある學會の儼存するは邦家の爲洵に慶賀に堪えず冀くは更に一段の努力を重ね以て我土木工學界の前途に光輝ある貢獻あらんことを一言以て祝辭とす。

昭和 9 年 10 月 26 日

内務大臣 後 藤 文 夫

内務大臣代理として内務技監青山 士閣下朗讀せらる。

文 部 大 臣 祝 辭

土木學會創立 20 周年を迎ふるに當り本夕記念祝賀會を開催せられたるは誠に慶賀の至りに堪へず。

土木學會は本邦土木工學界に於ける唯一の綜合的學術團體にして創立以來次第に隆昌に向ひ現今にては會員 4 千數百名に達し斯界の權威者を悉く網羅するに至り學術界に事業界に貢獻するところ少しとせず。

本官は此機會に於て土木學會が今後益々其の指導的精神を發揮し邦家の爲將亦人類の爲福利を増進せしめられん事を望む。

茲に些か蕪詞を述べて祝辭となす。

昭和 9 年 10 月 26 日

文 部 大 臣 松 田 源 治

文部大臣代理として文部次官三邊長治閣下朗讀せらる。

鐵 道 大 臣 祝 辭

本日茲に土木學會の創立滿 20 周年祝賀會に際しまして一言することを得ました事は私の最も欣幸とする所であります。

惟ふに古來より洋の東西を問はず一國文化の進展は土木事業の興隆に俟つこと誠に大なるものがあるのであります。

即ち鐵道、道路の建設は未開地を開發致し又港灣の築造は海運の隆興を促し河川改修

は水害を根絶し荒蕪を轉じて美田となし水力發電の事業は産業の隆盛を來す等土木工學の使命は數へ來れば數限りがないので御座います。

然るに我國に於ては地勢上土木工事の施工には幾多の困難を伴ひますから其の局に當る技術家の勞苦は極めて大なるものがあると存じます。

土木學會は只今會長の仰せの如く4千數百名の會員を有し我國に於ける主なる土木技術者の殆んど全部を網羅し本邦土木界に於ける唯一の指導機關であります斯くの如き有力なる機關によりまして今後益々斯界の進歩發展を計り全會員協力して土木報國の實を擧げられ益々國運の隆昌に寄與せられん事を希ふ次第であります。

一言所懐を述べて祝辭と致します。

昭和9年10月26日

鐵道大臣 内 田 信 也

社團法人日本工學會祝詞

日本工學會を構成する社員たる土木學會は創立茲に20周年を迎へられ今夕記念祝賀會を催さるゝに至りましたことは我々日本工學會社員一同の深く喜ぶところでありまして土木學會の爲め即ち延いて我國學術界の爲め誠に慶賀措く能はざるところであります。

土木學會の生れましたのは他の學會に較べますと比較的新しいのでありますが其の發展は特に著しいのであります殊に近年は會員も一段と増加し事業も各方面に向つて進展せられて居ります土木學會の斯くの如き進展は即ちやがて我日本工學會の誇であります我日本工學會が世界に對して重きをなす所以の一も亦茲にあると考へるのであります將來益々健全なる發展を遂げ國家社會の爲め一層貢獻せられん事を切望する次第であります。

聊か蕪詞を述べ祝詞と致します。

昭和9年10月26日

社團法人 日本工學會

社團法人日本鑄物協會々長祝辭

本日社團法人土木學會創立20周年記念祝賀會に當り社團法人日本鑄物協會を代表して祝辭を述べる機會を與へられましたことは私の深く光榮とする處であります。土木學會の指導せられる學問、事業の範圍は頗る廣汎で道路、鐵道、水道、河川、港灣、水力電氣等各方面に互り一般國民の日常生活に關與する事が最も深いのであります従つて20年

間の本學會の活躍は本邦文化の進展、國民生活の安定向上に貢獻する所が頗る偉大であつたのであります。

20年といふ歲月は本邦諸學會の年齢から見れば必ずしも長いとは申されませぬにも拘らずこの間に遂行なされた功績に至つては萬人の等しく確認、感謝する處であります。

又獨り學會に限らず工業を始めとして諸種の事業界、政治等各方面に偉大なる先輩を送られて居る事は誠に慶祝に堪へませぬ、願くば已に確立したる基礎に立ちて御發展なされん事を國家の爲に祈る次第であります。

終りに土木學會と私の代表する鑄物協會との關係を見ますに水道鐵管は殆んど全部鑄物でありまして本邦の製品は頗る優秀で遠く歐米に輸出されて居ります。其他土木事業に使用される機械類には鑄物が可なり多いのでありますから常に鑄物の進歩發達に御留意下され新製品を御利用なされ或は如何なる鑄物を造れば土木事業が進歩するかと言ふ點を御指摘下され御指導御啓發を蒙り相提携して邦家の爲に力を盡す事が出来ませれば眞に本懐であります。以上一言を列ねて祝辭と致します。

昭和9年10月26日

社團法人 日本鑄物協會々長 工學博士 石川 登喜治

以上祝辭終つて祝電の披露あり委員長の閉會の辭を以て祝賀會の終を告げ直ちに祝宴に移つたのである。約300名の土木技術界の權威たる人々が一堂に會した大宴會であるからその盛大さは筆紙に盡し難い感がある。宴酣となり此處彼處にさゝやかな歡談が交されてゐる間にやがてデザートに入るや會長先づ起ち一場の挨拶を述べ次の如き諸氏のテーブル・スピーチがあつた。

會長 久保田敬一君の挨拶

本夕土木學會創立20周年記念大會の祝宴を開くに當りまして多數の方々が御臨席下さいまして、此の宴會に光彩を添へられましたことは、會員一同の光榮とする所でありまして、厚く御禮を申し上げます。殊に官廳關係の方々は、昨今非常にお忙しい中を御繰合せ御來會下さいましたことを、深く御禮申し上げる次第であります。

土木學會は本年20年を迎へるのでありますが、お祝らしいお祝を致しましたのは今度が始めてでございます。滿10年の時にも、15年の時にも、何もお祝はなかつたやうに記憶致して居ります。一體エンジニアはぢみであるといふことを申しますし、又我々もさう思つて居ります。殊にエンジニアの中でも、土木關係のエンジニアは非常にぢみであるやうであります。其の中でも此の土木學會を指導せられた先輩の方々は非常にぢみであつたやうに思ふのであります。只今まで土木學會を指導せられた方々は、量よりも質を尊ぶといふことをモットーとして居られたやうであります。従て土木學會の會員諸君も、土木學會の會誌も、又會員の技術上の論文などには世界に誇るべきものもあると思ひますが、總て量よりも質を尊ぶといふことを目標として、居られたのであります。従て唯今まで餘り世間に名を出したことも、目立つたこともありませんが、其の内容の充實して居ることは驚くべきものがあるやうであります。

土木學會は本年20周年を迎へまして、殊に今まで先輩の方々の御指導に依つて、非常に充實したる團體を持つて居る譯であります。今後は此の充實したる所の立派なる團體を以て、一團となつて大に學界に貢獻すべき時ではないかと思ひます。殊に只今日本は危機と申しますか、重大なる時期である。此の重大なる時期に當りまして、土木技術者の

活動すべき仕事の範囲は、非常に大きな部分を占めて居るのであります。時局匡救であるとか、或は風水害の復舊、復興であるとか、いろいろの救済事業であるとか、主なるものは總て土木事業であるやうに思はれるのであります。斯様な土木技術者の仕事の非常に多事なる時に當つて、我々は次に此の鞏固なる團體を基礎として、大に活動しなければならぬと思ふのであります。此の 20 年を記念と致しまして、我々は今後社會各方面の御援助を得まして、大に活動したいと思つて居ります。

土木學會が大に團結をして、一團となつて居るといふことの一つの現れとして、土木學會の前會長の方々は、今回の 20 周年記念事業に對しまして、進んでお働きになつて非常に助け下さつたのであります。例へば中川前會長は土木工學論文抄録の編纂委員長として、那波前會長は講演會に關する委員長として、又名井前會長は土木學會史の編纂に當られ、眞田前會長は祝賀會に關する委員長として、それぞれ陣頭に立つて、大に働いて頂いたのであります。其の外各役員の方々、並にそれ以外の會員の方々も、全體總出馬で、此の 20 周年記念事業及び記念大會を催すことに御骨折を願ひまして、全く學會一致を以て、今日の如き盛大なる祝賀會を催すことが出来たのでありまして、是は全く土木學會の一致協力の結果であり、又今まで土木學會を指導せられました所の諸先輩の力であるといふことを深く感じて居るのであります。我々は是等の先輩の方々の後を承けて、今後土木學會のために、又土木界のために、延いては國家のために、大に力を盡したいといふことを、此の機會に申し上げたいのであります。

之に就きましては社會各方面の方々の御同情と、御理解を得ることが最も必要であると思ひますので、今日御臨席になりました皆様方に於かれましては、今後一層の御鞭撻を願ひたいと思ふのであります。今日はわざわざ御繰合せの上お出でを願ひましても、何等風情もございません。殊に不行届でございまして、席次などに於きましても、非常に失禮な點があつたことと思ふのであります。御來會の御禮を申し上げますと同時に、此の點を深くお詫び致して置きます。茲に會員と共に盃を舉げまして、來賓各位の御健康を祝したいと思ひます。(一同起立し乾杯せり)

文部次官三邊長治君の挨拶

本日は土木學會の創立記念大會を催されまして、盛なる記念の式を執り行はれまして同慶に存する次第であります。尙私共も此の盛宴に御寵招を蒙り、御芳志の段深く御禮を申上げる次第であります。實は文部大臣が親しくお見えになる筈でございましたが、差支がございまして、私が代理として伺つたのであります。多くの會合に代理として伺ふことも職務上已むを得ないこともあるのでございまして、本日は代理として伺ふことを誠に心持よく喜んで伺つたやうな次第であります。此の中には多數御承知の方がおられることと思ひますが、私は昭和 4 年より約 2 年間土木局長の職を潰しまして、土木學會の御係の方々から、非常に御厄介になつて居つたのであります。實は甚だ迂闊な話であります。御案内狀に接しました時には是は、文部省の所管であるといふことを知らないで自分が土木關係の方々と非常に懇意に致して居ります關係から、御案内を受けたものと思つた次第であります。本日此所へ伺ひまして、多年御親交を蒙つて居ります先輩の方々にお目にかかることが出来たことは、御馳走になりました以上に愉快に感ずる次第であります。

此の土木學會に御關係になつて居られる方々が、從來我國の土木事業に非常な御貢獻を爲されたといふことは、今更申す迄もございません。最近殊に私共感謝に堪へませんことは昭和 7 年所謂地方農村が非常に窮乏致しました時に、何等か茲に時局匡救の策を講じなければならぬといふことで、政府に於きましても、唯今久保田會長から述べられましたやうに、時局匡救のいろいろの施設を講ぜられたのであります。何と申しましても、其の當時土木事業を各地方に執行するといふことが、所謂時局匡救期の最も重要な眼目であつたと心得るのであります。これが豫期の通りの結果を舉げまして、少くも地方民心の安定を得たといふことは争はれない事實であると思ふのでありまして、土木學會に御關係の方々の御苦心及び御功績は、永久に忘るゝことの出来ない事柄であると思ふのであります。唯今伺ひますと、土木學會は將來益々土木工學竝に土木事業の進展の爲に御努力に相成ることでありまして、國家の爲に誠に慶祝に存する次第であります。私共微力な者であります。今後皆様の仰せに従ひまして、出来るだけ協力致したいと存じますので、吾々の盡すべき事がありましたならば、御遠慮なく御申付を願ひたいと思ひます。茲に重ねて本日の御寵招に對しまして厚く御禮を申し上げます。茲に杯を舉げまして會長始め會員諸君の御健康を祝したいと思ひます。

(一同起立し乾杯せり)

前會長古川阪次郎君の挨拶

唯今會長の御指名に依つて此所に立ちましたが、何等申上げるほどの事もございません。唯一言申して置きます。私は此の土木學會の創立の當時に於きまして、矢張り工學會の一員でありましたから、創立の協議の會に度々列しまして、さうして此の土木學會を組織することになつたのであります。別段盡力といふ譯ではありませんが、それに列席致した次第であります。確か土木學會が出来ましたのは大正 3、4 年頃であつたと思ひます。それはまだ私が盛な時分でありましたが、其の後會長になつた時には、私は遊んで居つたのであります。實は會長になりました時は、確か 9 代であつたと記憶して居ります。其の頃は閑でありましたけれども、最早老衰して居りまして、土木學會に盡すだけの氣力もない、又其の頭もない、全く無益な會長であつたのであります。併しながら其の後立派な人達が會長になられてだんだん盛大になりまして、今日では 4000 以上の會員があるといふことで、非常に喜ばしい次第であります。

就きましては老婆心であります。此の際一言申上げたいと考へます。それは近年我國では、地方が非常に困つて來ると、どういふものか何時でも土木事業を興して救済することになつて居る。今年の如きも非常に土木事業が興るやうな傾向になつて居ります。又鐵道省に於きまして、風水害のために土木事業を興すやうなことになりました。此の土木事業といふものは、我々の若い時分から見るとだんだん進歩して、非常に仕事がやり易くなつて來た。それは機械を用ひるといふことで、非常に進歩して來た。ところが救済といふことになると、どうも機械を用ひない方が宜いといふのです。人を救済するのであるから、成たけ人の力でやるといふのです。機械を成たけ用ひないといふことになると、茲に世の中の進歩とは少し違つた行き方になつて來る。機械を用ひないで、成たけ人の方に依つて仕事をして、人を成たけ多く使ふやうにしなければならぬといふのです。ところが土木事業を監督するものは、所謂土木出身者の方である。今日世の中の様子を見ますと、此の間の關西地方の様子を見ましても、小學校が澤山倒れた、小學校が澤山倒れたといふのはどういふ譯かといふと、何れ其のやり方が粗忽であつたのでありませう。併し、其の粗忽の原因を尋ねて見たら、如何になるかといふ事を考へなければならぬと思ひます。是は政黨の弊もありませう、いろいろの事情がありませうけれども、其のために手を抜いて、非常に悪い事をしたのではないか——悪い事ではないかも知れんが、當り前だと思つたかも知れんが、其の結果があるやうに聞いて居ります。今度又土木事業を興して救済することになれば、之を監督されるのは無論土木出身の方々である。さうして又さういふ非難が起るやうなことがありますと、我々土木出身者として甚だ遺憾に思ひますから、さういふことのないやうに、皆さんよく注意して頂きたいといふことを、老婆心から申上げる次第であります。失禮な事を申上げましたけれども、老人と思つてどうか御許しを願ひます。

(拍手)

會員桑原利英君の挨拶

私は朝鮮に 1 年、滿洲に 19 年勤務してゐる者であります。今御指名がありまして、何かお話をせよといふことであります。實は私は先刻午後 4 時 55 分に東京驛に着きまして、早速自動車で此所に駆けつけたのであります。ところが此の光榮ある御指名をお受けまして、洵に有難く存ずる次第であります。

私は大正 3 年に學校を出まして、滿鐵の方へ赴任致した者であります。丁度社會人として土木學會と同輩なのであります。土木學會が 10 周年を迎へれば、私も 10 周年を迎へる、土木學會が 20 周年を迎へれば私も 20 周年を迎へる譯であります。今回は土木學會の 20 周年記念祝賀會を御開催になりましたので、私個人の祝賀會を兼ねまして、此の席に臨んだやうな次第であります。

私共滿鮮に居ります者と致しまして、何としても欣快に堪へないことは、故國日本の土木事業の非常なる發展であります。私が 20 年前に學窓を出て、當事の新橋驛で訣れを告げまして滿洲に赴任しました當時と、20 年後の今日と、東京附近に就て比較して見ましても非常なる變化であります。私は 20 年前に滿洲に参りまして、滿洲人に——當時は支那人であります——日本をどう考へるかといふ質問を出したのであります。支那人は、日本は強い國である、日本の兵隊は實にえらいといふ言葉を漏した。それが 20 年経ちました今日、滿洲國人に、日本に對する感想を聞きますと、日本の國はえらい國だ、我々は日本人を盟主として大に東洋民族を糾合しなければならぬと申します。又 20 年前に、或る西洋人に、日本に對する感想を聞きますと、其の西洋人は、日本は實にビューチフルだと申しましたが、20 年後の今日、西洋人の感想を聞きますと、實にワンダフルだと申します。即ちビューチフルからワンダフルに變化して

居る。是は此所に居られる皆さんの御奮闘、御努力の結果であると信ずるのであります。此の意味に於て、茲に杯を舉げて皆さんに感謝の意を表したいと思ひます。(一同起立し乾杯せり)

會員小川敬次郎君の挨拶

今日は土木學會の 20 周年に當るのでありますが、土木學會は此の間雜誌の發行、各種の調査等を爲されて、社會に種々の貢献をされて居るのであります。殊に土木學界、土木事業界に種々の貢献をされたのでありますが、之と大體同じやうな外國の學會と比較して見ますと、我々の土木學會の事業が、外國の同じやうな學會の事業に劣つて居るとは言へないと思ふのであります。其の一例と致しまして、久保田會長のお話もありましたが、會誌であります。元來雜誌或は會誌なるものは、年所を経るに従て兎角其の内容が衰へて來るといふ傾がありますが、土木學會の會誌は 20 年を迎へました今日に於ても、聊かもさういふ傾向がなく、立派な内容を以て發行されて居るのであります。此の雜誌を、例へばアメリカのロジエンターとか、イギリスのミニューズとか、フランスのアナードといふ風な雜誌、其他ドイツ、オスターリーなどの澤山の雜誌に較べて、決して劣つて居らぬものと信ずるのであります。

私は一例として雜誌を挙げたのでありますが、其の外の事業に於ても、同様のことが言へると思ふのであります。斯の如く此の土木學會が種々な事業を遂行されまして、非常な貢献をされましたことは、會員諸君が會誌を通じ、或は講演會を通じ、或は調査會を通じて發表された所の結果に依るものでありまして、私共は會員各位に對しまして、感謝すべき至であると思ふのであります。最近時勢の進に顧みられて、土木學會の會則を變更されたのであります。只今いろいろお話がありましたが、今後も此の會の目的を遂行すべく、會員諸君が協力せられまして、土木工學、土木技術の上に光明を與へ、其の羅針盤たらんことを冀ふ次第であります。

終に臨みまして、外國より一つ劣つて居る所があると思ひますから、其の點を此の機會に申し上げたいと思ひます。ニューヨーク、或はロンドンにはエンジニヤ・ハウス、或はエンジニヤ・ホールといふものがあります。或は他の學會と聯合して一つの建物を造つて居るものもあります。其所には圖書館があり、談話室があり、其他總ての設備があつて、技術家が愉快に利用することが出来るのでありますが、我國にはさういふ會館がまだ出來て居りませんから、土木學會の會長を始め、各位に於て既にいろいろ御考慮中とは存じますが、どうぞ今後 10 年、20 年、或は此の次に 30 周年、40 周年の會合が若しあるとすれば、其の頃までには會館が出来るやうに、さうして會員が其所へ行つて、自由に研究の出來るといふやうにして頂きたいといふことを冀ふ次第であります。(拍手)

會員君島八郎君の挨拶

先刻來會長始め皆様のお話によつても分ります通り、會長竝に前會長諸氏の非常なる御盡力に預りまして、今回創立 20 周年を迎へたことは、皆様と共に御同慶の至に堪へない次第でございます。

熟々考へて見ますと我國は面積が非常に小さく、天然資源にも恵まれて居らないといふことは、争はれない事實でございます。恵まれて居らないばかりではない、一方に旱魃があるかと思へば、一方に洪水がある、其の上に風が吹くとか、其他の天災が非常に多いのであります。是は天然の力が我國を侵す所の攻撃力といふものが非常に多いことを示して居るやうに思はれるのであります。是は一方には非常な努力、非常な熱心を惹起しまして、殊に土木の方面に於きましては、天然の風水害といふやうなものに關係が深いのでございます。言葉を換へて申しますと、我々の日常生活に最も密接な關係を有つて居る所の交通事業とか、衛生事業とか、道路事業とかいふやうなことに非常に深い關係を有して居るのであります。さういふ事柄は、今日の社會機構の複雑な點から申しまして、決して土木のみとは申されないのでございますが、土木方面では、外の方面の専門の方々の指導をも仰ぎまして、一層努力しなければならないことを示して居るのだらうと思ふのであります。

又一方に交通機關、殊に航空事業の進歩は著しいものがあります。或は 1 時間の速力が 700 km を超えるといふやうなことも報ぜられて居ります。是は尙ほ多少の疑問があるやうでございますが、上空の方も最近 16 km (4 里位) の所まで達して居るといふことが報ぜられて居るのであります。成層圏の探險といふことは、唯徒らにやつて居るのではない、交通機關の上に最も速い速度を出さうといふことから出て居るのであります。陸上の鐵道では、例へば流線型の機關車の列車が出來ましても、今日迄の 2 倍、3 倍にするといふことはなかなか容易ではないのであります、

航空事業に於きましては、既に 4 倍、5 倍といふやうな速度を持つやうになつて居るのであります。成層圏の中の航空といふことになりますれば、もつと速いものになる可能性があるのであります。高空の航空といふことは、土木事業などにも関係があるもので、土木事業関係者として無關心で居られない事柄であると考へるのであります。皆様も協力協心致しまして、此の方面にも貢献を致すことが出来ますならば、土木事業の爲に甚だ光榮あることと存じます。本日御盛會に方りまして、一言皆様にも申上げる次第であります。(拍手)

會員高西敬義君の挨拶

私は昨夜電報を受けまして、あはてと罷り出たのでありまして、無論、今日は飛入りの一人でございます。只今會長より御指名に預りましたので、此の機會に於て、關西に於ける風水害の状況を、極めて簡単に申上げて見たいと存じます。

御承知の如く今回の低氣壓は、風水害のありました數日前に其の根を發したのでありますが、當日の午前 6 時には、徳島の東の海岸約 20 km の地點に於て 704 mm を示して居りましたが、3 時間を経ました午前 9 時には、琵琶湖の西海岸今津に於て、720 mm を示して居るのであります。即ち約 200 km の間を、40 km の急速度を以て進行した譯であります。

此の低氣壓の襲來によりまして、關西地方には 2 つの主な現象を現はして居るのであります。其の一つは雨量であります。温い空氣と冷い空氣との接觸面、其の不連続線に沿うて雨量が著しく多いといふことは、氣象學の上から申されて居るのでありますが、今回の不連続線の一部を圖面の上に現はして見ますと、鳥取、倉吉を徑て津山附近に至る約 30 km の地點を通りまして、低氣壓の進路に略々並行して居るのであります。従ひまして、津山、倉吉方面には、200 mm 乃至 300 mm といふやうな雨量がありました。その結果岡山縣を貫く旭川は、最大洪水として記録されて居る明治 26 年に比して、約 2 割に近い増水を見て居るのであります。26 年に於きましては、岡山附近は 4,50 mm、津山附近は 250 mm でありましたが、今回は岡山附近に於て 70 mm、津山附近に於て 300 mm に及んで居るのであります。岡山市内は勿論、其の附近の耕地約 6000 町歩に浸水して居るやうな状態であります。鳥取縣に於きましては、天神川といふ小さな川がありますが、其の背後に急峻な山を控へて居りまして、其所へ 200 mm、300 mm といふ雨が降りましたために、雨水が一時に流れ出て、倉吉の町は慘澹たる被害を受けました。殊に倉吉は背面の山崩れがありましたために、市内一面泥土となつて、流路が何所にあるか分らぬといふやうな状態でありました。鳥取市は、市内を流れて居る千代川が泥濘いたしましたけれども、幸ひ改修工事のために浸水を免れましたが、其の他の地方は相當の被害を受けたのであります。

更に兵庫縣に於ては、北部を流れて居る圓山川が、かなり工事が進んで居りましたけれども、尙ほ未完成の部分がありましたので、堤防が破壊いたしまして、豊岡、城ノ崎附近は全部浸水いたしました。被害を受けました地方の方々に對しましては、洵にお氣の毒に存じますが、將來の對策に就きましては、出来るだけ豫算を頂いて、出来るだけ工事を進めて、一日も早く完成するといふ以外に、致し方はなからうと存じて居ります。

尙ほ今回の低氣壓は、從來會て見ないやうな著しい低氣壓でありましたために、海面が非常に上りまして、大阪地方は殊に被害が大きかつたのであります。新淀川の入口にある量水標は、殆んど完全に近い數を描いて居りますが、當日の午前 6 時が丁度満潮の時間でありましたが、其の満潮から少し下りかけた時分に、低氣壓が著しく下つて参りました。7 時少し前になりますと、海面が非常に上つて來たのであります。大阪の棧橋附近にありました量水標は破壊されましたけれども、其の附近は約 18 尺に達したといふことが、明かに認め得るのであります。

斯の如く海面が非常に高くなりました所へ、更に風浪が加はりまして、一層被害を多くした譯であります。

従て今後の對策といたしましては、海岸に並行した防波堤が必要でありませう。無論防波堤の高さも、相當高くする必要がありませう。それは一面に經濟上の問題も伴ふ譯であります。今回のやうな高潮の場合にも、相當効果的のものであるといふ程度の防波堤にすることが必要でありませう。尙ほ解溜りが狭かつたために、艇が逃げ場を失つて、重なり合つて沈没して居る。又貯木場が適當でなかつたために、木材が皆流失して居る、九條通の電車通りに、直径 3 尺もある米松がごろごろして居つたといふやうな状態で、木材が方々に散亂してしまつたのであります。従て此の機會に、貯木場なり、解溜りを完備しなければならぬといふことが、大阪地方に於ける輿論となつて居ります。只今府、市

當局者が東京に出て参りまして、當局の方に種々懇願折衝をいたして居る次第であります、どの程度に改修、改築の計畫が具體化致しますか、今後の問題でありますけれども、御列席の諸君に於かれましても、種々御高配を願ふ所が多からうと存じますので、簡単に御報告申上げた次第であります。(拍手)

會員北澤忠男君の挨拶

我が土木學會が過去 20 箇年に於きまして、學術及び技術の研究に於きまして、光輝ある結果を得て居りますことは自他共に許す所でありまして、洵に喜ばしく感じて居る次第であります。併ながら學問及び技術の研究は、何のためにするのであるかといふことを考へて見ますと、申すまでもなく我が大日本帝國の文化の向上のために、7000 萬同胞の福利増進のために外ならないのであります。従て此の土木の學問及び技術を實地に應用する所の技術者の品性、人格といふものは、我國の土木界に於ける實際上の問題を支配するといふことを考へなければならぬのであります。學校に於きましては、中等學校に於きましても、大學に於きましても、それぞれ何等かの形式を以て、技術を修得する所の學生に對して、品性の陶冶、人格の向上といふことに努めて居るのであります。

然るに學校を出て實地に従事するやうになつてからは、技術者の人格、品性の陶冶に當る者は何人であるかといふことを考へました時に、我が土木學會ほど適當なるものはない、又土木學會は此の方面に對する所の唯一の責任者ではないかと思ふのであります。併しながら土木事業に携る所の技術者にして、若し土木學會の精神を十分に理解して、其の事業に携はつたならば過がないのではないか。従て全國に亘つて 4000 數百に垂んとする我が土木學會の會員の全部が、本會の精神を十分に理解して之に携つたならば、間違なく行けるのではないかと思ふのであります。

多くの會員諸君の中には、土木學會に加入することは、學會誌を取つて讀むだけのことであるといふやうな、簡単な考を持つて居られる方々もあるのではないかと思ひますが、是は學會の眞意義を解しないものであると思ひます。どうか將來に於きましては、土木學會の精神を十分理解せられまして、先程來いろいろお話のありましたやうな方面に努力せられまして、他の方面から指彈を受けるやうな事は絶対にないやうに、土木學會をして權威ある學會たらしめ、土木界の羅針盤たらんことを希望して已まない次第であります。此の意味に於きまして、特に地方に散在する會員をして、十分土木學會の眞意義を認識せしめるやうな方法を講ぜられんことを、此の機會に切望する次第であります。

(拍手)

かくして我土木學會創立 20 周年を記念する祝賀會は和氣瀟々の裡に終を告げたのである。時正に 8 時 30 分。當日の出席者は次の如くである。

來 賓

| | |
|---------------|---------------|
| 内閣總理大臣代理 | 福 田 耕 君 |
| 文部大臣代理文部次官 | 三 邊 長 治 閣 下 |
| 鐵道大臣 | 内 田 信 也 // |
| 内務大臣代理内務技監 | 青 山 士 // |
| 鐵道省建設局長 | 河 原 直 文 // |
| 鐵道省工務局長 | 平 井 喜 久 松 // |
| 東京府知事 | 香 坂 昌 康 // |
| 山梨高等工業學校長 | 清 水 半 吾 // |
| 日本鑛業會長 | 廣 田 理 太 郎 君 |
| 建築學會長 | 佐 野 利 器 君 |
| 帝國鐵道協會長 | 古 川 阪 次 郎 君 |
| 日本土木建築請負業聯合會長 | 竹 中 藤 右 衛 門 君 |
| 電氣協會長代理書記長 | 肥 田 玄 次 郎 君 |
| 日本鑛物協會長 | 石 川 登 喜 治 君 |
| 東京市政調査會長 | 阪 谷 芳 郎 君 |

都市研究會長後藤文夫代理
 水道研究會理事長
 日本ポルトランドセメント同業會長
 日本土木建築請負業聯合會副會長
 同上
 帝國=ニュー=ホーム鋼管株式會社
 信號會長代理
 秋知鐵道株式會社
 旭硝子株式會社社長代理
 日本工業新聞社長代理
 日刊工業新聞社長
 都市工學社長
 土木工學社編輯人
 シビル社主幹
 帝都電鐵株式會社
 上毛電力株式會社
 工政會理事長代理
 奧村組東京支店
 川崎製網工場
 目蒲電鐵株式會社
 靜岡電氣鐵道株式會社
 佐藤製作所
 中外商業新報社
 小山代吉君

阿南常一君
 井上秀二君
 淺野總一郎君
 錢高久吉君
 島田藤君
 齋藤義臣君
 杉山雄次郎君
 籠橋留次郎君
 上野清一君
 細居武二君
 小西百一君
 淺野守君
 柴田耕作君
 木下武之助君
 川又貞次郎君
 大川平三郎君
 東海工業合資會社
 東橫電鐵株式會社
 昭和火藥株式會社
 小田原急行鐵道株式會社
 日本=ホーム=管株式會社
 群馬水電株式會社
 栗原源藏君
 三木末吉君

計 43 名

會 員

| | | | |
|------------|------------|------------|------------|
| 安 藝 杏 一君 | 安 倍 邦 衛君 | 有 光 正君 | 秋 草 勳君 |
| 新 井 榮 吉君 | 秋 田 文 五郎君 | 青 木 楠 男君 | 芦 田 享 介君 |
| 生 駒 勇君 | 飯 島 馨 之助君 | 池 邊 稻 生君 | 池 上 重 吉君 |
| 石 川 榮 次郎君 | 石 田 昌 平君 | 井 口 鹿 象君 | 井 上 秀 二君 |
| 井 上 二 郎君 | 井 上 親 雄君 | 伊 藤 令 二君 | 一ノ谷 孝 三君 |
| 稻 垣 兵 太 郎君 | 今 井 哲君 | 今 泉 茂 松君 | 岩 崎 富 久君 |
| 岩 井 宇 一 郎君 | 岩 崎 瑩 吉君 | 岩 瀬 安 藏君 | 人 江 矩 夫君 |
| 五 十 嵐 信 作君 | 石 川 時 信君 | 上 野 有 芳君 | 内 海 清 溫君 |
| 内 田 莊 一君 | 内 村 三 郎君 | 宇 野 良 平君 | 江 澤 甚 一君 |
| 衣 斐 清 香君 | 江 守 保 平君 | 遠 藤 藤 吉君 | 小 川 織 三君 |
| 小 川 喜 七君 | 小 川 敬 次郎君 | 小 田 秀 吉君 | 小 田 靜 雄君 |
| 小 野 諒 兄君 | 小 野 基 樹君 | 大 河 戶 宗 治君 | 大 井 上 前 雄君 |
| 大 石 勇君 | 大 串 榮 太 郎君 | 大 島 滿 一君 | 大 竹 邦 平君 |
| 大 井 田 瑞 足君 | 尾 崎 秀 三君 | 岡 崎 正 伸君 | 岡 崎 保 吉君 |
| 岡 田 竹 五 郎君 | 岡 田 倍 治君 | 岡 野 昇君 | 岡 山 銀 次郎君 |
| 笠 井 通 義君 | 川 口 愛 太 郎君 | 榎 木 寬 之君 | 勝 目 清 二君 |
| 河 瀬 元 治 郎君 | 河 野 孝 藏君 | 金 森 誠 之君 | 神 原 信 一 郎君 |

河 口 協 介 君
 金 子 源 一 郎 君
 蒲 澤 惇 孚 君
 北 原 英 一 君
 藏 重 長 男 君
 黑 河 內 四 郎 君
 齋 藤 義 匡 君
 櫻 井 季 男 君
 佐 藤 俊 久 君
 重 田 末 藏 君
 清 水 定 次 郎 君
 澁 谷 彦 吉 君
 鈴 木 和 夫 君
 菅 辰 郎 君
 會 山 親 民 君
 高 橋 辰 次 郎 君
 田 賀 奈 良 吉 君
 田 中 三 郎 君
 田 淵 壽 市 君
 千 々 和 正 止 君
 遠 武 勇 熊 君
 中 川 幸 太 郎 君
 永 井 松 次 郎 君
 奈 須 川 文 夫 君
 西 尾 銚 次 郎 君
 野 口 誠 君
 林 將 治 君
 原 田 貞 介 君
 伴 川 淳 三 君
 古 越 一 三 君
 堀 村 種 雪 君
 前 川 貫 一 君
 三 浦 七 郎 君
 宮 長 平 作 君
 名 井 九 介 君
 森 川 藤 次 君
 八 木 正 夫 君
 山 田 胖 君
 米 山 辰 夫 君
 和 田 忠 治 君

神 代 雄 三 君
 緯 鳥 正 義 君
 加 賀 山 學 君
 北 澤 忠 男 君
 久 保 田 敬 一 君
 楠 宗 道 君
 小 暮 義 雄 君
 齋 藤 倫 君
 櫻 木 四 月 彦 君
 佐 藤 信 七 君
 重 松 愿 君
 篠 宮 彌 吉 君
 下 浦 眞 清 君
 須 山 英 太 郎 君
 關 錄 藏 君
 辰 馬 西 敬 義 君
 高 田 口 俊 一 君
 田 中 隆 作 君
 丹 治 經 三 君
 遲 塚 安 三 君
 戶 澤 耿 介 君
 中 末 郁 二 君
 永 那 波 光 雄 君
 西 田 精 君
 芳 賀 博 君
 林 爲 藏 君
 原 田 碧 君
 檜 山 千 里 君
 古 藤 猛 哉 君
 堀 內 貞 造 君
 松 浦 圓 四 郎 君
 眞 島 健 三 郎 君
 三 島 卯 四 郎 君
 三 宅 秀 太 君
 森 慶 三 郎 君
 森 田 三 郎 君
 山 崎 匡 輔 君
 米 元 晋 一 君

金 子 枉 君
 龜 田 素 君
 寬 斌 治 君
 君 鳥 八 郎 君
 草 間 偉 君
 桑 原 利 英 君
 小 阪 拓 次 郎 君
 齋 藤 貫 一 君
 佐 々 木 恒 太 郎 君
 眞 田 秀 吉 君
 鳥 野 貞 三 君
 生 野 團 六 君
 鈴 木 長 治 君
 浦 宗 三 郎 君
 關 信 雄 君
 高 橋 嘉 一 郎 君
 高 木 進 君
 田 邊 良 忠 君
 中 口 正 夫 君
 谷 口 三 郎 君
 上 田 鐵 雄 君
 豐 原 雄 太 郎 君
 中 野 深 君
 永 田 兵 三 郎 君
 丹 羽 鈿 次 郎 君
 西 出 辰 次 郎 君
 馬 場 豐 藏 君
 春 木 節 郎 君
 原 田 民 部 君
 平 山 復 二 郎 君
 藤 井 雄 之 助 君
 星 野 茂 樹 君
 松 尾 春 雄 君
 正 子 重 三 君
 三 野 熊 四 郎 君
 村 越 三 吉 君
 森 庭 忠 次 郎 君
 茂 本 新 次 郎 君
 山 口 十 德 次 郎 君
 吉 田 德 次 郎 君

金 子 寬 君
 上 山 鐵 之 助 君
 菊 池 英 彦 君
 木 下 武 之 助 君
 藏 重 哲 三 君
 釘 宮 馨 君
 小 室 親 一 君
 坂 本 丹 治 君
 佐 藤 利 恭 君
 井 八 洲 男 君
 清 水 一 德 君
 白 石 多 士 良 君
 鈴 木 雅 次 君
 末 森 猛 雄 君
 錢 高 作 太 郎 君
 高 橋 基 也 君
 高 桑 敬 二 君
 田 村 與 吉 君
 立 花 次 郎 君
 富 永 正 義 君
 中 川 吉 造 君
 仲 田 聰 治 郎 君
 永 田 年 君
 西 大 條 覺 君
 糠 橋 口 惟 行 君
 幡 錄 俊 次 君
 原 芳 男 君
 平 尾 昇 君
 福 田 武 雄 君
 松 村 務 君
 松 尾 末 太 郎 君
 三 宮 武 之 助 君
 村 瀨 花 之 亮 君
 森 井 健 介 君
 柳 々 瀨 正 哉 君
 山 田 隆 二 君
 吉 村 輝 惠 吉 君

記念講演會

本會創立 20 周年記念講演會は既報の通り昭和 9 年 10 月 27, 28 の兩日に互り午前中に開催せられた。講演者は 32 名であつたが 3 名の方が御病氣等の爲缺席されたことは誠に遺憾に堪えない次第である。何しろ一講演 12 分と言ふ短時間であつた爲講演者は充分お話の出来なかつた事は誠に相濟まない次第であるが先づ豫期以上の好評を博し得たことは誠に喜ばしい。出席者は兩日共約 400 名であつて非常な盛會であつた。講演内容は講演欄に詳述されてある。

創立 20 周年記念大會見學會記事

土木學會創立 20 周年記念大會見學會は昭和 9 年 10 月 27 日, 28 日の兩日の午後を以て舉行せられ参加者は第 1 日は 302 名, 第 2 日は 295 名の多數に上り内地は勿論遙に朝鮮滿洲方面よりの參會者あり, 本學會創始以來の盛會であつた。幸ひにして兩日は好天氣に恵まれ而も, 各見學場所に於ける主務者側の行届いた歡迎により參會者は何れも満足なる面持にて大いなる効果を納め得た事は非常に喜とする處であつた。

見學の箇所及び要領は豫ねて會誌に登載した處により下記の如く行はれた。

第 1 日

期 日 昭和 9 年 10 月 27 日 (土曜日)
 集 合 土木學會事務所 (丸ノ内 3 ノ 6 ユニオン館一階) 午後 1 時
 見學場所 (1) 專賣局業平工場 (2) 新帝國議事堂
 行 程 午後 1 時 10 分土木學會事務所前より自動車に分乗午後 1 時 40 分專賣局業平工場着同工場を見學し午後 2 時 40 分同工場より自動車にて新帝國議事堂に到り同議事堂建築に就て約 20 分間管轄管財局工務部長工學博士大熊喜邦君の施設説明あり同議事堂を見學し午後 4 時頃解散とす。
 會費不要

第 2 日

期 日 昭和 9 年 10 月 28 日 (日曜日)
 集 合 東京市中央卸賣市場事務所 4 階講堂午後 0 時 40 分 (京橋區築地 5 ノ 1, 市電築地終點又はバス築地魚市場前下車)
 見學場所 (1) 東京市中央卸賣市場 (2) 東京築港及び第三壘場 (3) 東京市芝浦下水處分場
 行 程 東京市中央卸賣市場にて昼食をなし午後 1 時 10 分より約 40 分間東京市中央卸賣市場, 東京築港, 芝浦下水處分場等に就て市當局の施設説明あり午後 1 時 50 分より中央卸賣市場を見學し午後 2 時 20 分同所棧橋よりランチに乗船東京築港を見學し第三壘場の上陸休憩同所より再び乗船芝浦下水處分場前に上陸同場を見學し午後 4 時頃解散とす。
 會費不要

東京地方專賣局業平分工場

27 日午後 1 時 10 分參會者は土木學會事務所前に勢揃の上 13 臺の大型バスに分乗し一路本所區業平分工場に向ひ, 同 1 時 30 分到着した。

一行のために專賣局より業平分工場要覽なる印刷物の配布を受け直ちに多數の掛員の御案内説明に依り順次工場内の作業状況を參觀したのであるが, 此處では敷島・朝日及び曉の 3 種を製造して居て 1 箇年製産高 (昭和 9 年度の豫想) は口付 (敷島・朝日) 20 億本, 兩切 (曉) 30 億本と豫想せられてある。

1 階では曬の葉組、葉拵作業、2 階では曬の截刻、巻上、包装、3 階では敷島・朝日の葉組、葉拵、截刻、包装の作業を行つてゐたがそれを參觀する吾々のため特別に廊下より參觀さして貰つた。3 階の敷島・朝日の巻上作業は特に作業室の中に入つて顔を近づけ手を觸れんばかりに見學することを得た。

この作業室に於ては右手には敷島の巻上機が陣列を布き左手には朝日の巻上機が陣列布いて居て各機は白衣の女工 1 人宛に見守られ恰も生あるが如く底力のある非常な唸りを發して各巻上機は吾劣らじと言はん許りに截刻された煙草、幅 1 寸位の長巻の薄い胴紙、幅 1 寸位の長巻の堅い口付紙と粘とは巧妙に工夫せられた機械装置に操られて敷島・朝日の 1 本、1 本の出來上りを時計のセコンドの速さよりも早く機械の傍のポケットへ吐出して居るのである。

これ等の 1 本 1 本は煙草の詰り具合と言ひ、長さ、直徑及び粘付具合と言ひ實に均一的に製造されて居る。これは製葉、製織、印刷、及び電球製造作業等と共に製出される品物は均一的、大量的にして且つ勞力の節約化等が出来る様に各作業を機械化し然もこれを工業化して居る、この近代科學の力、即ち人智の盡くる事なき偉大さに今更乍ら感歎した次第である。斯様な専門外の諸工場を見學する事は吾々に或刺戟を興へ非常に有益である事を痛感する。

工場參觀後 2 階の大食堂で茶菓の饗應を受けた。米元副會長は起ちて大要次の如き挨拶をせられた。

今日は吾々のために充分參觀を御取計ひ下つた皆様には厚く御禮を申し上げます。吾々は大いに啓發された事が多々ありました。而して吾々一行の大部分は愛煙家でありまして煙草製造の實際作業を見せて頂き大變幸でありました。本日は態々局長閣下の御出迎下され又各幹部の方々が吾々のために御案内下された事に對し一同に代り厚く感謝を申述べる次第であります。

これに對し專賣局長より大要次の如き挨拶があつた。

今日當工場の參觀を願つた事は吾々の光榮とする所であります。承れば次の見學會の御都合で時間を非常に切り詰められたとの事でありましたので、一部の作業は廊下の外から御見せしたと言ふ次第で曬の巻上、包装作業等に就き何分の御説明が出来なかつた事を残念に思ひます。曬は本邦に於ける兩切煙草中特種の作業方法に依るものであります。先般新聞社の方々の參觀の折、曬の包装設備を見てこれを新聞印刷作業中に應用して見たいとの事でありました。本日は折角の御來場なるにも拘らず吾々の不行届の點は御諒承を御願ひいたします。

次に兩切・口付煙草作業順序を表示すれば、

兩切作業順序及び方法

| | | | | |
|-----|-----------------------|-------------------|---|---|
| 葉 組 | 原料受入 原料調和 解包及葉選 | 濕 需 浸 漬 焙 蒸 | 懸 吊 | 受入を了したる各種の原料を包装の儘溫度攝氏 38 度濕度 85~90% (季節により異なる) の調和室に數日間藏置し後續作業に於て取扱の際生ずる葉屑を減少せしむ |
| | | | | 包裝を解き 1 單位 400 kg 毎に用途を定め原料種類別に秤分す |
| | | | | 内地米種は竹竿に懸吊し攝氏 90~100 度濕度 90~100% を標準とする高温濕器機内に約 1 時間通過せしめ適度の濕氣を與へ、内地普通葉は香液に浸漬したるものを竹竿に懸吊しチェーン・コンベヤーにて送らること約 15 分間にて焙蒸機に達し溫度攝氏 120~230 度の加熱部、濕度 90% 以上を標準とする調和部中に前後通じて約 1 時間分通過せしめ原料を焙蒸す |
| 葉 拵 | 截葉加葉堆 | 柄割香拵積 | 葉柄を截斷し葉煙草を 1 枚宛剝離しつゝ各種類を配合し機械により第 2 回目の香液を加へたる後葉の方向を拵へ堆積箱に積込み香液を平均に浸潤せしむる爲め 1 晝夜藏置す | |

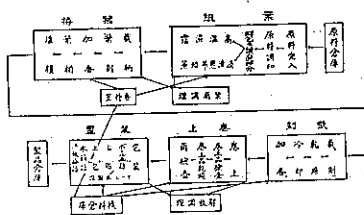
| | | |
|------|---|---|
| 裁 | 刻 | 刻乾冷加 剝煙却香 第 2 回目の香液を加へ濕氣を含みたる葉煙草を機械により裁刻し固着したる刻筋を 1 本宛解舒し乾燥機、冷却機を通過せしめ適當の狀態に乾燥したるものに第 3 回目の香液を加へ 1 晝夜調和す |
| 卷 | 上 | 卷上 卷上品検査 卷上品乾燥 1 晝夜調和し適當なる狀態になりたる原料を機械にて卷上げ 1 本宛嚴密なる検査を行ひこれを季節、天候等に依り異なるも大體溫度攝氏 38 度湿度 50 % 以下の製品乾燥室に入れ 1 日以上藏置し乾燥したる上再び乾燥程度の検査を行ふ |
| 裝 | 置 | 包裹詰 ボール函詰貼 上上木箱貼 又は紙函詰 機械にて製品を 20 本宛錫紙と包裹に包み封緘紙を貼付しボール函詰上貼及び上包を施し木箱詰又は紙函詰を了す |
| 葉屑調理 | | 葉組、葉拵作業より生出したる屑葉は再び使用し得る分と使用不能とに選別す |
| 解放調理 | | 卷上、裝置作業より生じたる不良品を解放し再製に供し得る分と使用不能の分とに選別す |
| 工 作 | | 機械の部分品、器具機械の製作修繕 |

ロ付作業順序及び方法

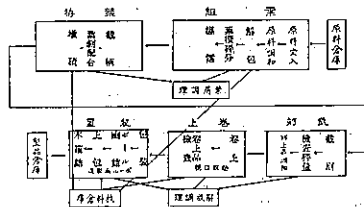
| | | | |
|------|---|------------------------------------|---|
| 葉 | 組 | 原料受入 | 受入を了したる各種の原料を包装の儘溫度攝氏 32 度湿度 85~90% (季節により異なる) の調和室に數日間藏置し後續作業に於て取扱の際に生ずる葉屑を減少せしむ。 |
| | | 解葉秤 | 包選分 包装を解き 1 單位 100 kg 毎に用途を定め原料種類別に秤分す。 |
| | | 濕 | 煙草の性狀乾濕に應じ異なるも攝氏 30~35 度、湿度 90~100 % を標準とする濕槽機内に約 20 分間通過せしめ適度の濕氣を與へ原料素質の向上を圖ると共に後作業の操作を容易ならしめ葉屑の生出を減少せしむ。 |
| 葉 | 拵 | 葉柄配合 | 葉柄を裁斷し用途別種類別にベルト・コンベアーの上に 1 枚宛刻離し葉の縦の向をベルト進行方向に直角に配列し而して其の層積の厚さが常に一定になるやう各種類を配合し堆積箱に積込み適度の壓搾を加へ原料の素質を柔軟にする爲め溫度攝氏 30 度湿度 80% を標準とする處に 1 晝夜藏置す。 |
| | | 堆積 | |
| 裁 | 刻 | 刻 | 1 晝夜堆積したる葉煙草は配合を亂さざる様裁刻機に縦に挿入し機械により刻まれたるものを風送式刻精選裝置により輸送しつつ中粉に混合し一定量に秤量の上卷上作業に適應する含濕度を得る爲め調和を行ふ。 |
| | | 刻上品調和 | |
| 卷 | 上 | 卷上 | 適度に調和したる原料を機械にて卷上げ 1 本宛検査を行ひ不良品を摘出し更に嚴密なる検査を行ふ。 |
| | | 卷上品検査 | |
| 裝 | 置 | 包裹詰 | 機械にて卷上品を 20 本宛包裹に包み封緘紙を貼付しボール函に 20 個宛詰め木箱詰を了す。但し贈答用 (數島 10 個入)、特別裝置 (數島 6 個入) 及び卓上用 (數島 100 本入) にはボール函詰品に上包を施す。 |
| | | ボール函詰 | |
| 葉屑調理 | | 葉組、葉拵作業より生じたる屑葉は使用可、不能とに選別す。 | |
| 解放調理 | | 卷上、裝置作業より生じたる不良品を解放し再製に供し得る原料を選別す。 | |

第 1 圖

兩切製造作業順序圖解



ロ付製造作業順序圖解



一行は午後 2 時 35 分業平工場に別れを告げ再び自動車で龜町區新議事堂へと向つた。

新 國 會 議 事 堂

午後 3 時吾々一行は議事堂に到着し、營繕管財局工務部長大熊喜邦氏の御出迎へを受け先着順に長列を作り目下盛に石工の打振れる槌の響きに或種の興奮を感じつゝ先づ衆議院本玄関より目下盛に内部裝飾のための足場の下をくゞり乍ら衆議院議場へと入つたのである。議場内は電燈なきに明るい、目を轉じて明りの本をたづねると花鳥模様入りの奇麗な總ガラス張りの天井よりの自然照明であつた。正面を見ると宮城に面して御座所があり、其の下段には大臣席並に演壇又その下段には速記者席、其の前方が 466 個の議員席（豫備席合して 635 席）が劇場の 1 階席の様に並んでゐる。各席の卓上には氏名記入立札が鐵製で而して嚴重なヒンズで立伏せ出来る様にしてあつた。之れで議場亂闘芝居の唯一の道具が奪はれる理で玉座前の神聖を保つための苦心の一端が窺はれた。

御座所正面 2 階最前列は 90 席の新聞記者席があり、續いて 678 席の傍聴者席があり、傍聴者席より向つて 3 階右方は貴賓席官吏席があり、同左方は貴族院議員席となつて居る。議場内部設備は殆んど完成してゐて何時でも使用出来る様になつて居た。而して議場は緋のカーテン、絨毯を主としたもので自然採光設備と相待つて場内のふんいきをいやが上にも落付かせ玉座を中心として場内の神聖さを一段と増して居る様に思はれた。

次に議場内を通り抜けて議員室、總理大臣室、大臣室等の廊下を通抜けると丁度彼の高く聳ゆる白亜の中央高塔の下に出た。中央高塔の正面側より 2 階へと上つた。まだ階段並に壁は化粧工事準備中と見えて鐵筋が露出して足場が多數設けられて居た。2 階へ上ると衆議院委員室が廊下の左右にあり行詰り左折すると花鳥模様入の大大理石の大廣間の所へ出たこの右側には便殿附屬室、御化粧室それから便殿があり、貴賓室、同化粧室等があり、この廣間は廊下と連絡して衆議員御座所並に貴賓席へ直接連絡して居る。

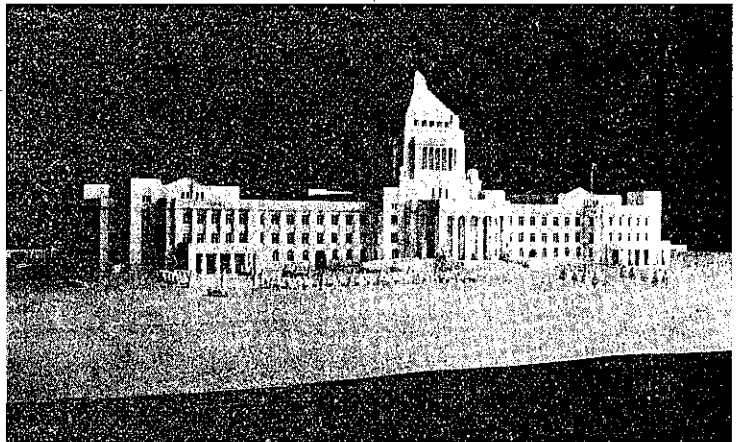
再び中央塔下へ来て階下を眺めれば花鳥模様入り大理石造の大廣間がある。此處は文武百官が階下を御出迎申上げる處で非常に広いコンコースと

なつて居る。夫れから上方を望めば 216 尺の中央高塔の内面には假足場が全面に施されあり目下盛んに裝飾工事中であつた。次に再び階段を上ると丁度中央高塔の根本から衆議員議場の屋上へと出た。此處から宮城丸ノ内一帶の諸官衙地帯これから赤坂、四谷方面を轉望すれば豫想に反し青々した森の間に諸官衙が轉在し實に珍しい景色であつた。それから夕日を受けた白亜の高塔を頷を傾けて望めば中央高塔は高く雲間に聳

へ、而して或崇高さを無言の裏に表現し新國會議事堂の理想を表現して居る様に思はれた。兩中央高塔を下り貴族院の方の設備も衆議院と同様との事で見學を打切り貴族院玄関より外に出て新議事堂見學を終了し此處で自由散會を行ひこれで見學會第 1 日は無事終了したのである。時に午後 4 時であつた。

次に新議院本館建築の概要を記すれば

第 2 圖 議 院 本 館 模 型



中央は御車寄、向つて右端が貴族院玄関、同左端が衆議院玄関である

新議院本館建築の概要

永田町の高臺に東を正面として、南北に長く新議事堂は建てられてゐる。其の敷地は、明治 19 年議院及び諸官衙建築の計畫された時、既に決定されたもので、議會開設の切迫してゐたので、内幸町に假議院を建築し、爾來今日まで、そこに帝國議會は開かれたのである。其の間屢々本議院建築の議は起つたが實現を見ず、大正 6 年の通常議會に於て、漸く豫算の協賛を経て、翌 7 年臨時議院建築局（今は營繕管財局となる）が置かれ、茲に漸く本建築に着手したのである。當初の豫算は 750 萬圓、10 箇年繼續事業といふ事であつたが、其の後種々な事情で豫算の増減があり、事業年度の延長又は短縮を受け、目下約 2 650 萬圓 19 箇年繼續工事となつて昭和 11 年度には、本館の建築を竣成せしむることになつてゐる。

新議院本館の規模は次の通りである。

| | | |
|------|-----------|--------------------------|
| 敷地坪數 | | 20371 坪 |
| 敷地標高 | 本館前面地盤 | 海拔 88 尺 (26.66 m) |
| | 正門前地盤 | 同 67 尺 (20.30 m) |
| | 西側永田町通 | 同 98 尺 (29.70 m) |
| 坪數 | { 建坪數(主階) | 3750 坪 |
| | { 延坪數 | 17780 坪 |
| 階數 | | 3 階 (1 部 4 階) 外に地下階 |
| 幅員 | { 正面長 | 681 尺 (206.36 m) |
| | { 側面長 | 292.5 尺 (88.63 m) |
| 高さ | { 一般高さ | 69 尺 (20.91 m) |
| | { 中央塔高さ | 216 尺 (65.45 m) |
| 構造 | { 基礎 | ベデスタル式コンクリート杭打 |
| | { 壁體 | 鐵骨、鐵筋コンクリート造 (花崗石張) |
| | { 床及び屋根 | 鐵骨、鐵筋コンクリート造 |
| 建築様式 | | 近世式 |
| 總室數 | | 390 室 |
| 議場坪數 | { 貴族院議場 | 225 坪 (巾 105 尺, 奥行 78 尺) |
| | { 衆議院議場 | 460 坪 (巾 105 尺, 奥行 78 尺) |
| 議席數 | { 貴族院 | 460 席 (最大限 635 席) |
| | { 衆議院 | 466 席 (最大限 635 席) |
| 傍聽席數 | { 貴族院 | 770 席 (内記者席 92 席) |
| | { 衆議院 | 922 席 (内記者席 90 席) |

東京市中央卸賣市場

28 日午後 0 時 40 分一行は築務地中央市場 3 階事所に勢揃をなし東京市役所より次の印刷物の配布を受けた。

| | |
|--------------|----------------|
| 東京市中央卸賣市場概要 | 史跡品川墓場概要 |
| 東京港修築計畫書 | 東京港概要 |
| 東京港を語る (其の一) | 東京市下水道と芝浦汚水處分場 |

而して本學會見學委員長小川氏の紹介で次の 4 氏より御話しを伺つた。

| | | | |
|------------|--------|-------------------|-----------|
| 中央市場庶務課長 | 桑 原 徹 | 東京市中央卸賣市場に就いて | (約 25 分間) |
| 東京市土木局建築課長 | 小 野 二郎 | 東京市中央卸賣市場建物設備に就いて | (約 25 分間) |

| | | |
|------------|-------------|-----------|
| 東京市港湾部技術課長 | 森 田 三 郎 | |
| | 東京港修築に就いて | (約 35 分間) |
| 東京市土木局下水課長 | 高 橋 基 也 | |
| | 芝浦汚水處分場に就いて | (約 20 分間) |

東京市中央卸賣市場 に就いて中央市場庶務課長桑原徹氏よりの御話しの大要を記せば、

現在品川、千住、神田、江東、京橋、赤羽、駒込等 68 個所の卸賣市場があつて、其處には鮮魚に 800、青果に 650 計 1250 餘りの問屋業者があり、これらの手によりて 500 萬東京市民の臺所に供給されて居るのである、これを金額に見積りて 1 箇年間の東京市民の消費量は鮮魚 7500 萬圓、青果 5000 萬圓、鳥肉玉子 7800 萬圓、其他 1500 萬圓合計 1 億 5 千萬圓である。而してこれ等の取引設備は衛生上より見て甚だ不充分のもの許りであり又取引の點より見るも各自氣儘な取引が行はれて居て甚だ非合理である。

例へばこの千數百名の問屋業者は生産者に非常に無理な競争をやらせる、又生産者には鮪 1 匹が 100 圓に賣れたか 50 圓に賣れたかが判らぬし、又 1 時間遅れたために値段が非常に下つたと云ふ様な事共が多いのである。

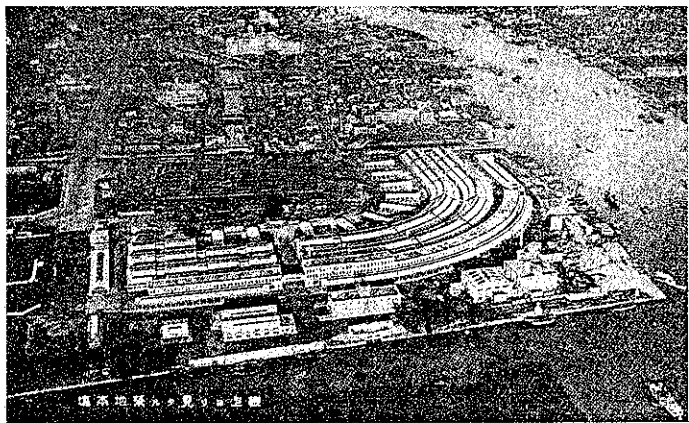
之等の無理な取引のために毎年 7,8 萬圓位の無駄な金が使用されて居る、これ等の埋合せは自然市民の臺所に影響することとなるのである。斯くの如き不公正の取引が澤山行はれてゐる様に思はれるので茲に既存の問屋業者を整理統合する必要が起つて來るのである。然るにこれ等の取引は無制限發展により何んとかせねばならぬなり問屋業者間に於ても對策が研究せられる様になつて來た。先づ日本橋市場が率先して統制ある監督の下に吾々を統一的にして貰ひたい時の政府に請願したのである。其の後小賣市場が非常な發展を來したので東京市に於ても種々研究せられ商工省に於ては大正 12 年の春に中央市場法の制定を見るに至り、これが公布せられたのである。而して現在東京市に於ては 1 本場（築地）、2 分場（神田、江東）が帝都復興事業の 1 つとして建設され、夫々市設卸賣市場として舊市場の問屋業者、仲買人を暫定的に收容して市場業務が行はれて居るのである。

第 2 次計畫としては近市の荏原、豊多摩、北豊島、南足立の 4 個所に市場建設手續が進められて居る。

問屋業者統合の方法には單一收容整理と複數收容整理とがある。東京市會では只今の處複數制を採用することにして居る。例へば問屋が 1 會社を組織してこの市場に入れば單數制市場となり、2~3 人以上に組合を作り卸賣人となり得る様にしてある。現在業界の實績は神田 3 箇收容、江東 3 箇收容、大根河岸 2 箇收容となつて居る。

商工省は神戸、大阪、横濱には業種別單一制をやらして居る状態であるが、東京市會に於ては單一制、複數制に就きて目下慎重に比較研究中である。千數百名の問屋の自由氣儘が消滅さるればこれ等の毎日打つ電報料金は 1 日約 30 圓見當であるから消費者の不經濟の負擔から除かれる事が出来るのである。而して品物は仲買人（公衆）の面前で競買され 1 割を生産者へやる事に成つて居て、今迄の様に其の利得に有付けず一番困るのは千數百名の

第 3 圖 新築される中央卸賣市場築地本場



問屋業者となるのである。

鮮魚の方は板舟權の問題で目下行惱んで居る。舊日本橋市場は昔徳川家康が三河の國より 30 數名の魚商を江戸へ連れて來たに始まり現在では之れが約 600 名に達して居るが、これ等の人々は 2 尺×6 尺の板を軒先に並べ如何に立派な家を持つて居ても道路の真中で必らず商賣をする。而して立派な店舗の中には自轉車とか合羽等が置いたり掛けたりしてある有様である。震災前までは 214 名の問屋で 9 千何百尺かあつたのであるが、これ等は何れも區劃整理による移轉を命ぜられたので、補償費百萬圓を要求したのであるが、これが 90 萬圓、70 萬圓、50 萬圓となり、未だにこれが解決を見ずに今日に至つた。此處では板の代りコンクリートで出來て居るからコンクリート權と言ふのが出來るかも知れないと一同を笑はせる。

今後吾々はこれ等の千數百名の問屋を整理統一して一般市民即ち皆様の臺所より輿論を起して市民の福利増進に務めたいと思ふ。

中央卸賣市場建物設備に就いて土木局建築課長小野二郎氏より大要次の様な御話があつた。

この市場では荷は夜間に入り始め早朝に入りて始めて業態が活動的となつて來るので短い業務時間の間に取引されるのでこれ等を統制管理するのであるから設備も出來る丈經濟的に使用しなければならぬ事に成るのである。

當築地本場の敷地面積は約 6 萬坪で大部分は元海軍省の用地で、又春風、松風と言はれて居た松平侯の御屋敷跡で 8 千坪餘に互る大きな池があつた、これ等の上に此處の建物は出來て居るのである。

建物工事は昭和 5 年 4 月着工し、同 8 年 10 月大略竣成を見るに至つた。道路の方も今日御覽の通り大體完成して居ります。本工事は東京市河口課と建築課との共同事業で、汐留からの専用鐵道設備は鐵道省に依託したものである。

貨物の入荷豫想數量は水陸併せて 1 日約 1 340 ton で水運によるもの約 45%、陸運によるもの約 55% の割合である。水運設備としては 3 000 ton 級 1 隻、500 ton 級 3 隻が同時に接岸し荷役出來る様に成つて居て、陸運の方は汐留驛より青物 25 車、魚類 55 車計 80 車が同時にホームに到着出來る様に成つて居る。

夜間に入りたるこれ等の荷物は短時間の間に卸賣場に運び、これを整理して仲買人の手に渡し、仲買人は未明より市中より來て居る買出人に賣捌く仕組に成つて居るのでこれ等に都合の良い様に建物の大きさ、形状、道路の幅等は設計されて居るのである。

市場の廣さから言へば此處は世界的であると言つてよい、歐洲では斯様な市場は散在して居るが米國には全然ない。

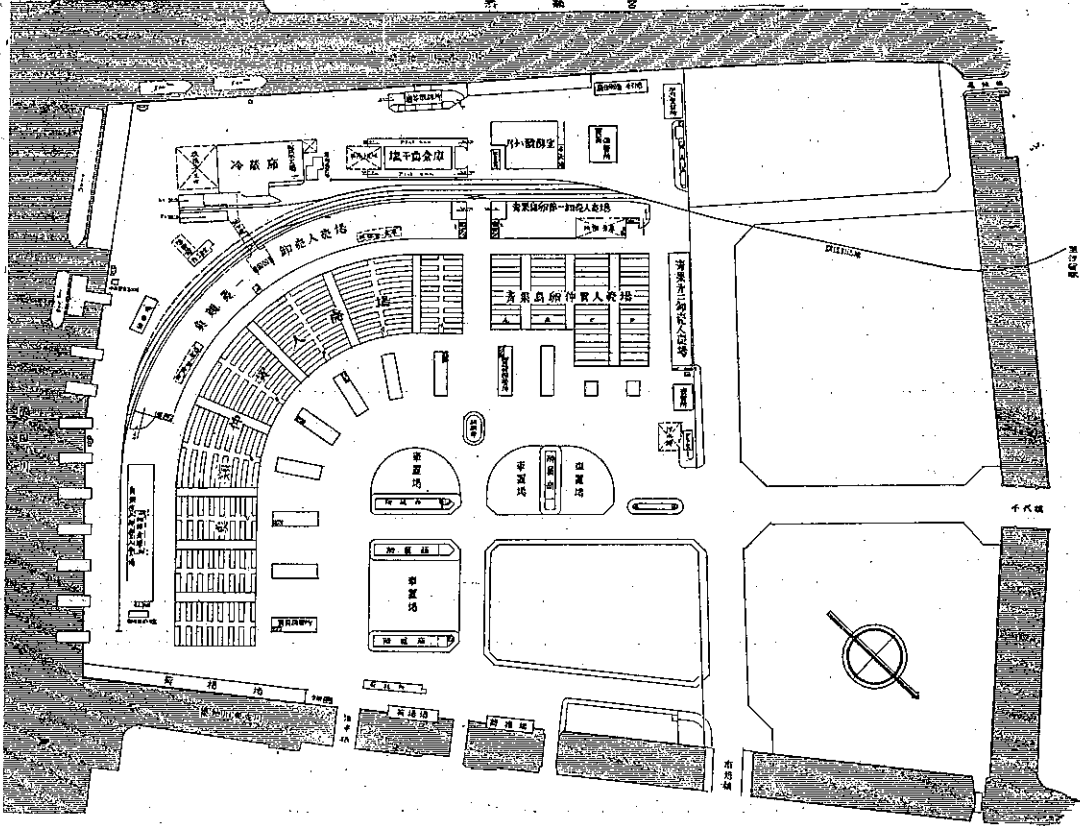
業態は氣候状態により異なり又これによりて建物の形状も變つて來る。我國はこの點では開放的施設で出來る。本市場も開放主義を採つて居る。

外國では品種は少ないが我國では品種が大變多く而して熱、火、雨等の影響を受け易いもの許りである。それで出來る丈上家設備が必要であるが、豫算の関係で充分な設備が出來なかつた。併し賣場は出來る丈廣くし、見透を良くし取引が自由に出來る様にしてあつて各賣場の業態が一望の下に見える様に出來る丈柱類の間隔を大きく取り徑間を 26 m を標準としてある。これからの一般の傾向は大ホール式となる様に思はれる。

魚には臭氣があるから出來る丈通風設備に留意して設計した。冷蔵庫 (-12°F) 2 000 ton 收容又 1 日 1 000 ton の製氷設備、44 ton の冷凍設備等を設計した。

建物と建物及び場内と場外との關係建物間の通路の配置並に幅、多數の照明設備、塵埃搬出、又使用水と排水との關係等を考へ設計した。又此處では業務後の清潔のため床等を洗滌するので非常な水量を必要とするのであ

第 4 圖 築地本場建物配置圖



るが水道によるは不経済と認め井戸により 5 000 石のタンクを設備し、汚水は 1 500 m³ のタンクに集水し市の下水道へ導く。4~5 時間の間に使用される水量が莫大であるから一時前記の溝内のタンクに集め徐々に市の下水道へ吐出す仕組にしてある。

此處には種々の車が入場するので舗装にはこれ等を考へ數種類のを設計してある。埋立の上に建て、ある市場であるのでその弱い基礎には杭打工を施工し車に對しては花崗石、アスルト・コンクリート等を配し、それ等は大體其處の地質によつて施工されてある。舗装延坪は 24 480 坪である。

時間の關係で簡單で不要領の段は御寛恕を乞ふ次第である。

東京港修築に就いて港灣部技術課長森田三郎氏より大略次の様な御話があつた。

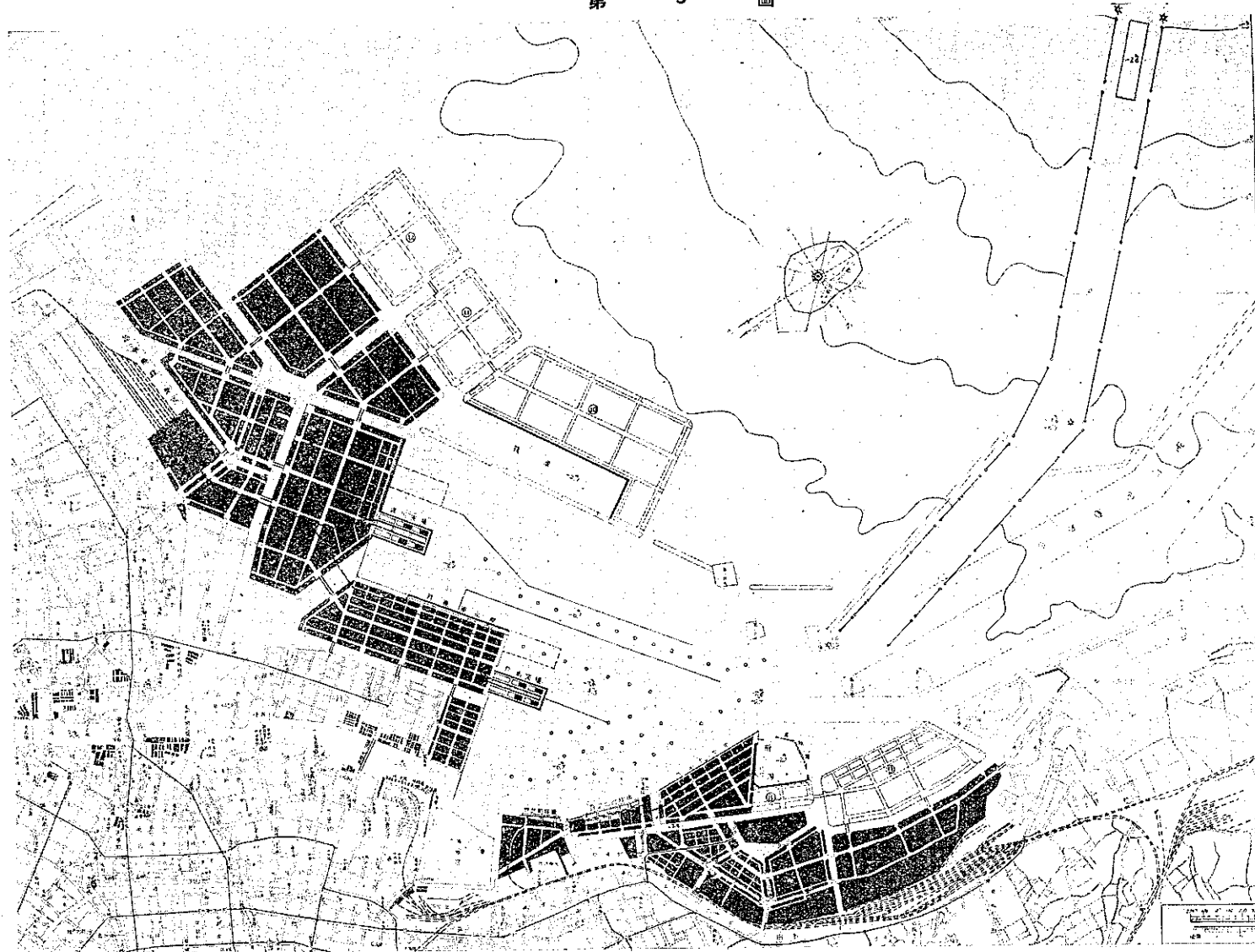
時間が段々迫つて來たからこれから 4 隻の船に乗つて頂き其の場で詳しく御説明申上げる事にし、茲では御一同に申上げて置き度い事のみを申述べる事に致します。

明治 40 年呱呱の聲を上げてから今日まで母の胎内で 23 年を過して來ました。東京港修築工事は其の前明治 17 年頃から其の必要を高唱せられて居たものであるが、この間の成長のスピードは非常に素晴らしいのである。東京港の inter land は内容が充實して居るから横濱港に於て本船荷役をなす時は時間とか經費とかの經濟的方面より船がドンドン入つて來ると言ふ有様で東京築港のために今日尙追ひに追はれて居る状態である。

直木博士が明治 40 年に計畫されたのは river improvement として隅田川河口に工費 260 萬圓を投じ 70~

第 5 圖

東京港平面圖



凡例

| | |
|--|------|
| | 工業地帯 |
| | 埠頭 |
| | 鐵道線 |
| | 道路 |
| | 水路 |
| | 公園 |
| | 建築物 |
| | 駅 |
| | 橋 |
| | 島 |
| | 灣 |
| | 川 |
| | 海 |

東京港平面圖
 縮尺 1:50,000
 昭和二十一年三月

80 間の岸壁を造り水深を 12 尺とするものであつた。而してこれが明治 40~44 年まで繼續され、其後第二期計畫（工費 247 萬圓）として範圍を廣められたので築港らしくなり 1000~1500 ton 内外の船が入る様になつて來た。大正 11 年から第三期となり同 12 年の震災で計畫を代へて同 14 年 1800 萬圓、水深 22 尺、1300 間の假防波堤を作り而してコンクリートと木とで導流柵及び 500 間のケーソン岸壁を造り今後は 5000~6000 ton の船が入り得る様に成つた。この施設では年計約 360 萬 ton の港内荷役をなし得るに過ぎず且つ現在では既に 500 萬 ton も實際入つて居ると言ふ有様であるので、今回東京港修築計畫に着手し、工費 3800 萬圓の案を建てたのである。而して 6000 ton の船を入れ得る事にし道路計畫、臨港鐵道、ブイも多數増加した。これによると 6000 ton 以下の船 80 隻を同時に繋泊させる事が出来るのである。

港内荷役能力は 750 萬 ton であるが、これは今日既に飽和の状態にあるから本計畫の完成の昭和 10 年には 800 萬 ton の豫想であるから狹隘を感じることに成る。

東京築港計畫の第一期時代は山縣内務卿の時代品海築港の認可を不許可にされたりして明治 18~40 年迄は非常に苦難な歴史時代で、安政 6 年 6 日開港を宣言して以來明治 20~30 年が横濱築港時代であると思ふ。オランダ人ムルドー氏が river harbour の案を建てたに對し古川前土木學會長、佛人ウノー、中山土木學會前會長等が調査議論された事がありこれ等の人々は東京築港には忘れる事の出来ぬ恩人である。

第二期時代に入つて東京の素晴しき進展に伴ひ、横濱港は内國貿易の影響を受ける事が大きいと東京に苦情を申込んで來た事があつた。この時東京は吃水 30 尺以内、横濱は 40 尺として兩港は相共に提携將來圓滿なる發展を上げるを至當とすると、土木學會が仲裁された事がある。

其後土木學會鐵道協會共同で調査なされた事もある。東京築港は今人間に譬ふれば 27 歳の發育盛りであるから土木學會に於かれても今日から充分御留意を御願ひ致したい。

芝浦汚水處分場に就いて土木局下水課長高橋甚也氏より大要次の様な御話があつた。

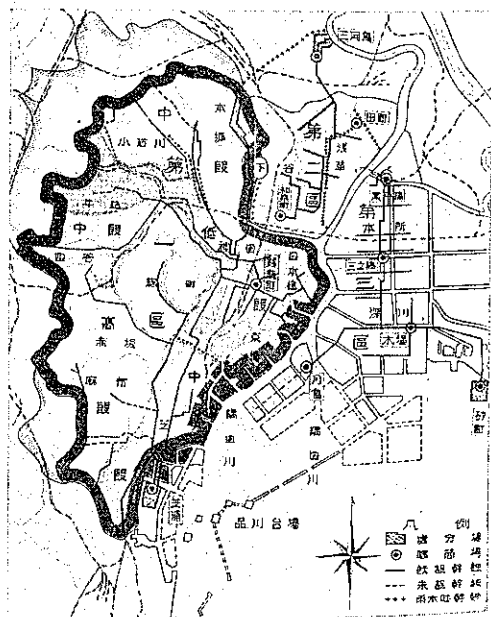
下水道計畫の大要

東京市下水道は原則として合流法に依るも、分流法を用ふる特殊の箇所もある。雨水及び汚水を同一管渠に收容して汚水及び汚水の倍量迄の雨水はこれを處分場に送り、それ以上の水量は適所に餘水吐を設けて附近の河川濠池に放流するのである。然し下谷淺草の低地及び本所深川の大部分の雨水は、自然流下が出来ぬので唧筒場に集め、雨水唧筒で汲揚げ附近の運河に放流するのである。

下水排除量は將來の人口を 300 萬と豫想じ 1 人 1 日當り汚水量 167 立 (6 立方尺) とし、時間的的最大汚水量は右水量の半量を 8 時間内に排除する。即ち 24 時間平均汚水量の 1.5 倍として計畫して居り、雨水量は 1 時間 50 mm に取り所謂合理公式に依り算出する。

下水排除の區域系統は全市 15 區を 3 つに分け第 1 區、第 2 區、第 3 區と稱してあるが、第 1 區とは麴町、京橋 (月島を除く) 日本橋、内神田等市の中央部から山の手一帯に亘る廣大なる區域で、この外これに隣接する舊郡部の内必然的に流入する區域をも合せて總排水面積 1820 萬坪、計畫人口 210 萬人に達するものである。

第 6 圖 東京市下水處分區劃圖



本區域は土地の高低に依つて更に高段、中段、低段と分け雨水は夫々河川濠地に放流されるが低段の汚水は先づ錢瓶町唧筒場に集り汲揚げられて後芝浦汚水處分場に送られ、中段及び高段の汚水は直接芝浦汚水處分場に達し此處で處理された水が直接に東京港内へ出るのである。

第2區は上野、本郷臺以東、神田川、隅田川に囲まれる地域であり、計畫人口 60 萬人を有し、汚水は荒川邊三河島汚水處分場に送られ處理された後荒川に放流される。區域内の一部外神田及湯島臺下の汚水は特に和泉町に設けられたる中繼唧筒場により附近の幹線に汲揚げられ送水される。又淺草新堀は古くから雨水排除のための用をなして居るものであるが、之を被覆して暗渠となし各下水管よりの雨水放水路に利用し其の流末に當る淺草田町に雨水唧筒場を設け豪雨時には此處で雨水を汲揚げて山谷堀に吐くのである。

第3區は江東一帯及び月島を含み計畫人口 70 萬人を有し、汚水は砂町汚水處分場で處理されて東京灣へ出るのであるが、元來本地域は一帯に低地であるが故に汚水は逐次業平橋、三ノ橋、月島、木場の各唧筒場で汲揚げられて砂町汚水處分場まで運送されるのである。此の外業平橋、三ノ橋、木場の3唧筒場は夫々所屬區域に於ける豪雨時の雨水排除にも備ふるものである。

東京市下水道の規模

| 排水區 | 排水面積 單位 (1000) | 下水道延長 單位 (間) | 唧筒場 | | | 汚水處分場 | | | |
|-----|-------------------|-----------------|---------------|-----------|-------|----------|-----------|--------|--|
| | | | 名稱 | 位置 | 敷地 | 名稱 | 位置 | 敷地 | |
| 第1區 | 高段 4415 | 136790 | | | | | | | |
| | 中段 6793 | 271000 | | | | 芝浦汚水處分場 | 芝區芝浦高濱町 | 51768坪 | |
| | 低段 3661 | 180530 | 錢瓶町唧筒場 二丁目 | 麹町區大手町 | 4089坪 | | | | |
| 第2區 | 2495 | 7600 | 和泉町唧筒場 | 神田區和泉町 | 137坪 | 三河島汚水處分場 | 荒川區三河島二丁目 | 55924坪 | |
| | | | 田町唧筒場 | 淺草區田町 | 978坪 | | | | |
| | | | 業平橋唧筒場 | 本所區吾嬬橋三丁目 | 1344坪 | | | | |
| 第3區 | 3787 | 194740 | 三ノ橋唧筒場 | 本所區徳右衛門町 | 1046坪 | 砂町汚水處分場 | 城東區南砂町九丁目 | 62000坪 | |
| | | | 木場唧筒場 | 深川區豊住町 | 2699坪 | | | | |
| | | | 月島唧筒場 | 京橋區新佃島東町 | 290坪 | | | | |
| 合計 | 21151 | 954150 | | | | | | | |

芝浦汚水處分場沿革

1. 明治 44 年東京市區改正委員會で始めて樹立した第 1 區汚水處分場計畫は英人バルトンを主任として工學博士古市公威外 7 氏の調査に成つたものでこれに依ると第 1 區の汚水は分流式を以て芝金杉 3 丁目唧筒場に集め唧筒力によつて揚水し徑 7 呎の管を布設して品川驛附近に於て海に放流す。計畫人口 892500 人、所要工費 169000 圓。
2. 明治 40 年臨時委員工學博士中島銳治氏改めて東京市下水道計畫を建て第 1 區汚水處分場案としては汚水は合流式を以て芝浦唧筒場（現在芝浦 1 丁目）に集め唧筒力によつて揚水し徑 5 呎の鐵管 5 條を以て隅田川及び新運河を横切り第 7 臺揚附近に設くるセブチックタンクを有する處分場に送り充分沈澄の上干潮時に於て放流す。計畫人口 1700000 人、工費 5458000 圓。
3. 大正 9 年第 2 期事業に於て芝浦唧筒場着工前大震災に遇ひ第 2 期事業は中絶した。
4. 市の發展膨脹は決定計畫を其の儘踏襲するを許さざる情況となりたるを以て、大正 11 年臨時下水道調査會を設けて計畫に再吟味を加へ、芝浦唧筒場位置は埋立 6 號地先（現在處分場位置）としこれより市 12 尺高 9.4 尺の馬蹄形渠 5800 間を以て六郷河口羽田に送り、此處に沈澱池、淨渣槽、消毒設備等を有する汚水處分場を建設して沈澱下水は干潮時にのみ放流す。計畫人口（市内、郡部共）1900000 人、工費（送水管路共）12160000 圓
5. 大正 13 年帝都復興事業により既定計畫に於て愈々芝浦唧筒場工事に着工、昭和 4 年その竣工を見るに至つた（第 1 次施設）。
6. 前記の處分は假施設のものであり且下水道事業の進捗につれてその機能に不足を告げ昭和 5 年遂に擴張工事を決定し翌 6 年より工事に着手、同 7 年にこれが竣工を見たのである。（第 2 次施設）。

7. 昭和7年市は遂に市内下水道全部の完成を企て、第1區汚水處分場についても種々實施調査を行ひ具體案を考究したる結果、更に變更の必要を認め、第1區汚水處分場位置を羽田より現在の處分場位置に變更し、在來の假設備を擴張すると共に計畫の内容に於ても沈澱放流の様式を高級處理に改めたのである。随つて芝浦囃筒場の稱呼が廢止され芝浦汚水處場と改稱せらるゝに至つた(第3次施設)。

これに對し久保田會長は大要次の様な挨拶をされた。

今日は大工事の實狀を拜見に參りました所、工事が専門的に涉つて居て殊に吾々日常生活にかへつて詳細な御説明があり、且つ行届いた御接待を受け又これからは各方面の皆様にご迷惑を相掛ける事と思ひます。參加會員一同は非常に喜んで居る次第であります。一同に代り茲に御挨拶を申述べる次第であります。

次に本市場魚類卸賣場、同仲賣人賣場及び青果卸賣場、同仲賣人賣場並にバナ、醱弊室、鹽干魚倉庫や鐵道引込線設置並に埠頭設備を見學し同所にて一行は午後2時55分4隻のランチに分乘して隅田河口を下り竹芝、日出町及び芝浦等の岸壁施設を海上より視察した。次に東京港修築工事の概要を表示すれば

東京 築 港 の 浩 葦

| 工 事 名 | 繼續年度 | 工事費 (1乃至4は精算額 5,6は豫算額) | 工 事 内 譯 |
|----------------|---------------------|---------------------------|---|
| 1. 第1期隅田川口改良工事 | 自明治39年度 至 同 44年度 | 2 512 406 圓 | 浚渫 自永代橋至港口 延長 9 550 m 幅員 91~127 m 水深 3.6 m 浚渫土量 2 719 000 m ³ 埋立 面積 474 441 m ² 日ノ出町物揚場 延長 667 m 水深 3.6 m |
| 2. 第2期隅田川口改良工事 | 自明治44年度 至大正5年度 | 1 923 289 圓 | 浚渫 自永代橋至港口 延長 9 160 m 幅員 127~218 m 水深 3.6 m 浚渫土量 3 931 000 m ³ 埋立 面積 782 657 m ² 防砂堤 延長 3 680 m |
| 3. 水陸連絡設備工事 | 自大正13年度 至 同 14年度 | 1 573 530 圓 | 日ノ出町棧橋 延長 564 m 幅員 13.6 m 水深 6.1 m 同 上屋 8 棟 面積 17 587 m ² 同船舶給水設備給水栓 7 箇 曳 船 第 1, 第 2 日ノ出丸 |
| 4. 臨港鐵道敷設工事 | 自昭和3年度 至 同 5年度 | 272 074 圓 | 臨港鐵道延長 2.7 km 可動橋 1 橋 |
| 5. 第3期隅田川口改良工事 | 自大正11年度 至昭和8年度 | 17 944 563 圓 | 浚渫 航路及船溜面積 3 736 000 m ² 水深 2.5~7.6 m 浚渫土量 19 474 000 m ³ 埋立 面積 3 512 110 m ² 芝浦町岸壁 延長 909 m 水深 7.6 m 假防波堤 自第3臺場至6號埋立地先 延長 2 886 m 防砂堤 延長 877 m 繫船浮標 7 箇 挂燈浮標 2 箇 標識浮標 13 箇 |
| 6. 東京港修築工事 | 自昭和5年度 至 同 14年度 | 33 000 000 圓 | |

同 2 時 17 分史蹟品川第 3 臺場の上陸し、史蹟見學後東京市より茶菓の饗應に預つた。臺場から愛宕山や高輪臺一方隅田河口附近の工業地帯等を望めば非常に長閑で全く都塵を脱したるの感があり、都會生活の焦燥と疲労から遁れて、かゝる環境に浸る事は都會人にとつて必要である。而して此處は夏は涼しく冬は暖であるとの事であるから理想的の海上公園の名に恥ない。次に品川臺場史蹟の概要を抜粹すれば

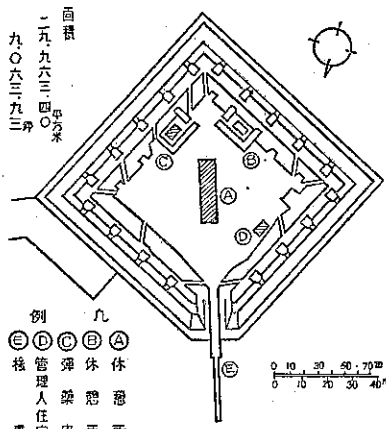
品 川 臺 場 史 の 概 要

洲崎沖から品川に向つて海上 2 列に點在し「お臺場」と稱へられてゐる嶋嶼は、即ち品川臺場である。嘉永 6 年 6 月 3 日米艦の浦賀來港は、我國の上下を震撼せしめ國を擧げて恐怖と狼狽の巷と化せしめ、遂に幕府をして最後の決心を餘儀なく爲さしむるに至つた。これ即ち品川臺場の築造である。然るに幸ひ、折衝の任に當つた浦賀奉行や、

林大學頭の措置よろしきを得て、米糶は明年の再來を約し、同 12 日抜鎖したので、一時の小康は得たが、黒船襲來の警報に驚いたのは、幕府の有司のみならず、一般市民は江戸全滅の秋が、眼前に逼つたかの様に騒いだ、斯く民心の動搖を目先に見た幕府は如何に狼狽し心痛したか分らぬ。海防は暫しも捨置き難き故に、閣老阿部伊勢守は、先年近海防禦に對し、屢々建議した伊豆韭山代官江川太郎左衛門を招いて、和戰の利害及び國防武備等に關して、詳細なる諮問をなし、嘉永 6 年 6 月若年寄本多越中守に命じて、武相房總の海岸見分を行はしめ、江川氏をこれに隨行せしめた。この結果最も經費尠く、且短時日の間に江戸灣防備を完成せしめんと、品川沖の臺場築造に一決したのである。斯くて幕府は、同年 8 月 2 日、勘定奉行松平河内守近直、同川路左衛門尉聖謨、目付堀部部正照、勘定吟味役竹内清太郎、同格代官江川太郎左衛門の 5 人に、内海臺場築造に關する調査を爲さしめ、同月 28 日臺場御書請並大筒鑄立を右 5 人に命じたけれども、眞に泰西の兵學、築造法に通曉し砲臺設計の任に當り得る者は、江川氏一人であつた。而して最初の計畫は、南品川獵師町から東北深川洲崎の海岸に連珠の如く、2 列、11 基と、品川獵師町の海岸に 1 箇所と併せて 12 箇所築造の豫定を以つて、先づ 1, 2, 3 番の 3 基に着手した。これペリー提督が浦賀を去つてから僅か 2 箇月後である。工事大凡 8 箇月で翌安政元年 4 月竣功した。5, 6 番の兩基及び品川獵師町の砲臺は、安政元年正月著手して、同年 11 月竣功し、4 番 7 番は、工事半を以つて中止し、8 番以下は全然著手しなかつた。此の築造に要した杭木は、關東方面の御材木を用ひ、岩石類は相模、伊豆、安房邊から取寄せた。土砂は品川御殿山を初め泉岳寺境内及び高輪、品川の諸侯宅の高地を掘鑿して使用し、石工、土工、は殆んど全國より集つて、5000 人に達し、土砂運搬用の土船も 2000 艘と云はれてゐる。この故に海陸共、非常に混亂したので、東海道筋の高輪海岸は晝間土塵の通行を禁止した程である。乍併江川氏の秘記に依れば、幕府の財政は、この設計を其の儘實行出來ず、従つてこれが實際的に、果して何程役立ち得たかは疑問と言はなければならぬが、當時の國情としては、これ以上望むことは不可能であつた。

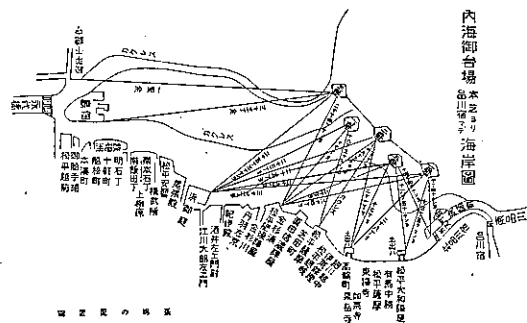
然れ共斯る大工事大難事が、僅かな日月の間に竣功したと云ふことは眞に驚嘆せざるを得ない、これ即ち我が日本國民性の貴き象徴ではなからうか。我が祖先の麗はしく力強い獻身的精神の具現として、心血を注いで築かれた品川臺場も工事半にして、翌安政元年正月米使節の再來、神奈川條約の締結となり、引續き英露の兩國とも和親を結び、

第 7 圖 第 3 臺場略圖



場台番三

第 8 圖 品川臺場配置圖



同 5 年 6 月日米條約の調印に續いて英、蘭、佛、諸國とも通商條約を締結してこれを實戰に使用する機會は與へられず、永久に廢壘となつた。而してこれ等の締結は、手續上多少の非難はあつたとしても、寧ろ時の有司の處置よろしきを得て江戸を砲火の慘害から免れしめたことは、私等市民の爲に誠に幸ひであつた。

斯くて時世は移り明治維新を經、品川臺場は廢壘の儘、大正 3 年迄陸軍省の管理であつたが (4 番は維新當時他に拂下げた) 大正 3 年、4 年の 2 回に亘つて處分せられた。その中 3 番 6 番は同 4 年 7 月 4 日東京市に拂下げられ、同 13 年 2 月 5 日東京府知事に依り史蹟として假指定されたので、公園課の管理となり續いて同 15 年 10 月 25 日、史蹟名勝天然紀念物保存法に依り、内務大臣の指定を受けた。然し前者は幾分内部の造構を失ひ、且大正

大震災の爲に破壊して居たので、これに適當の復舊工事を加へ、臺場公園と稱し、唯一の海上公園として一般に公開した。3番臺場は、良く原型を存してゐるので、貴重なる史蹟としてこれが現状保存に努めてゐる。

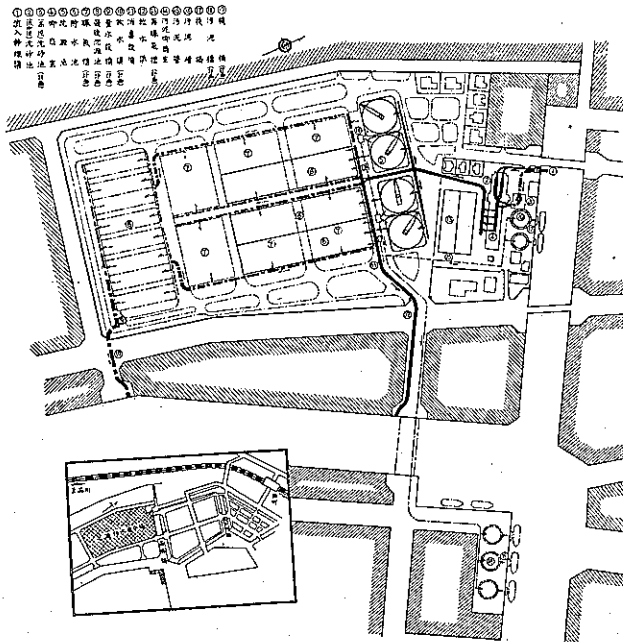
午後3時43分一行は再びランチに打乗り目下盛に埋立工事中の第8號、第9號埋立地域を船側に轉望しつ同3時55分には第3號埋立地高濱橋際に到着上陸し直ちに芝浦污水處分場に到り同所掛員總動員で吾々一行を場内隅なく説明付きで參觀した。次に此處の施設の概要を記すれば

芝浦污水處分場施設概要

第1次施設 (昭和4年竣工)

| | | |
|---------|---|-----------|
| 工 費 | | 1260000 圓 |
| 敷 地 | | 5450 坪 |
| 沈 砂 地 | 18.79 m × 6.06 m × 2.7 m | 2 池 |
| 揚 砂 機 | バケツコンペヤー式 3.7 K. W. | 2 臺 |
| スクリーン目 | 2.54 cm, 全幅 2.43 m | 4 面 |
| 主 ポ ンプ | | 7 臺 |
| | 410 mm 22.5 KW, 揚水量毎分 17.0 m ³ | 2 臺 |
| | 610 mm 52.5 KW, 同 毎分 42.5 m ³ | 3 臺 |
| | 810 mm 97.5 KW, 同 毎分 85.0 m ³ | 2 臺 |
| ポンプ室上屋 | | 696 坪 |
| 事務室公舎其他 | | 267 坪 |
| 沈 澱 池 | 81.81 m × 21.21 m × 2.1 m | 2 池 |
| 汚 泥 槽 | 徑 14.55 m, 容量 500 m ³ | 1 槽 |
| 殺 菌 装 置 | ワーレストイヤナン會社製 | 5 臺 |
| 滓渣運搬船 | 60 m ³ 積自走船 | 1 隻 |
| 滓渣積出場 | | 1 箇所 |

第 9 圖 芝浦污水處分場一般圖



第 2 次 施 設 (昭和 7 年竣工)

| | | |
|-----------|---|-------------|
| 工 費 | | 2 129 000 圓 |
| 敷 地 | | 12 360 坪 |
| 主 ポ ン プ | | 9 臺 |
| | { 920 mm, 180 KW 揚水量毎分 120 m ³ | 2 臺 |
| | { 既設 7 臺は 1 部改造 | |
| 沈 澱 池 | 45.72 m × 45.72 m × 3.66 m | 3 池 |
| 汚 泥 掻 集 機 | トラクション・クラリアフアイヤ毎時 2 回轉 | 3 臺 |
| 貯 水 池 | 170 m × 40 m × 3.66 m | 3 池 |
| 汚 泥 槽 | 徑 22 m, 容量 1.580 m ³ | 1 槽 |
| 殺 菌 装 置 | クロレーター會社製 | 3 臺 |
| 滓 渣 運 搬 船 | 60 m ³ 費自走船 | 1 隻 |

第 3 次 施 設 (昭和 8 年着手)

| | | |
|-----------------|----------------------------|-------------|
| 工 費 | | 9 800 000 圓 |
| 敷 地 | 33 960 坪 (船場水面積をも含む) | |
| 沈 澱 池 | (計畫中) | |
| 揚 砂 機 | (同) | |
| ス ク リ ー ン | (同) | |
| 主 ポ ン プ | | 12 臺 |
| 第 1 沈 澱 池 | 45.72 m × 45.72 m × 3.66 m | 1 池 |
| 汚 泥 掻 集 機 | トラクション・クラリアフアイヤ毎時 2 回轉 | 1 臺 |
| 曝 氣 槽 | (計畫中) | |
| 第 2 沈 澱 池 | (同) | |
| 汚 泥 掻 集 機 | (同) | |
| 再 曝 氣 槽 | (舊沈澱池使用) | 1 槽 |
| 汚 泥 槽 | (計畫中) | |
| 殺 菌 装 置 | (同) | |
| 滓 渣 運 搬 船 | (同) | |
| 滓 渣 積 出 場 | (同) | |
| 諸 建 物 及 附 帶 設 備 | (同) | |

見學後東京市より茶菓の御接待に預り午後 5 時同所に於て一行は散會した。斯くて 2 日間に亘りたる記念すべき土木學會創立 20 周年記念大會見學は大成功裏に終了したのである。終りに臨み見學場所關係の方々により多大なる御援助を賜はりたるに對し厚く感謝の意を表し本見學會記事を擲筆する次第である。

會 報

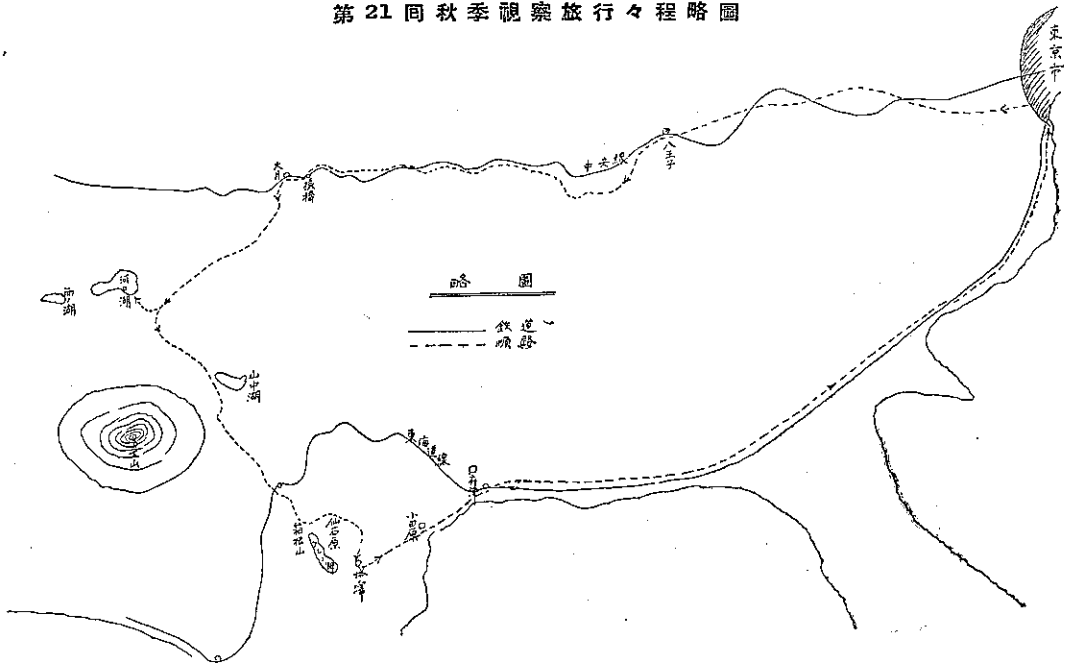
第 20 卷第 12 號 昭和 9 年 12 月

第 21 回秋季視察旅行記事

今秋の視察旅行が次の如きスケジュールの下に舉行された。

- (1) 視 察 場 所 富士五湖並に國立公園箱根探勝
- (2) 期 日 昭和 9 年 11 月 18 日 (日曜日)
- (3) 集合場所及時間 同日午前 7 時 30 分までに東京中央郵便局前 (東京驛乗車口横) 集合。
- (4) 行 程 遊覽自動車 (高級車) にて午前正 8 時出發甲州街道を大ダルミ猿橋, 大月を経て河口湖に到り河口湖ホテル別館にて昼食休憩, 午後 1 時同所を出發山中湖を視察し, 御殿場を経て長尾峠に到り休憩, 麗容富士を觀賞し箱根塔の澤環翠樓に着き, 懇親會を開く。午後 7 時歸路につき午後 10 時頃東京中央郵便局前にて解散す。
- (5) 會 費 金 11 圓

第 21 回秋季視察旅行々程略圖



此の地へのドライブとしては、聊か時期遅れの感もあつたが、何分今秋は本學會の 20 周年記念として、種々の催しやら、事業が進められ、日時の都合上かく遅延を見たものであつた。

次第に天候悪化との前夜の豫報に氣を腐らせたが、この日は全く豫想を裏切つて日本晴れの好天氣となつた。

26 名の参加申込者は、先づ定刻、指定場所たる東京中央局前に參集を見、かくして 2 臺の遊覽自動車に分乗、8 時 10 分出發、内務省東京土木出張所並に横濱土木出張所より寄贈をうけた順路の各關係國道筋工事圖等に見入

りながら、一路甲州街道へと驀進を續けた。

8時35分新宿バス、空は愈々碧く晴れ渡り、陽の光りは窓一杯に射し込んで十分の暖を興へ、懸念された車中の寒さも全く杞憂と消し飛んだ。

次第に都塵去り、騒音又遠ざかつて、舗装完成せる8號國道の快走が續く。府中を過ぎる頃、豫て用意せるウキスキーの角燧が口を切られる。銘々に小さなウキスキーカッパとビーナツとが渡されて一杯機嫌への旅へと變はる。車内には團樂の囁きが次第に多くなつた。全く明朝そのものゝ旅である。参加人員は、何時もの行に比べて少數ではあつたがこの気分、このなごやかさは一家族なればこそ味ひ得る楽しさではあるまいか——と思はれた。

9時30分八王子バス、道は砂利道に移り、此のあたりより三々五々、折柄の日曜一日の行樂に、ルツクを背に杖引く人々の群を見受けられた。間もなく右前方、萬山紅葉の間、綠樹鬱蒼たる幽邃境を見る。大正天皇の英靈永へに神鎮ります多摩御陵の地、車中ながら謹んで遙拜する。高尾山のケーブルも見えた。

進むに随ひ、丘陵谿谷は兩側に迫り、山又山の間、縫ふが如くしてひたすらに走る。運轉手に速度を問へば、平均時速40km位との答、下り坂路にかゝり、急カーブすると見るや、眼界遽に展げ、車は急停車する。時に9時55分、大垂水である。こゝにて一同下車、茶見世の溢茶にのんど濕うしながら附近の眺望にみとれる。

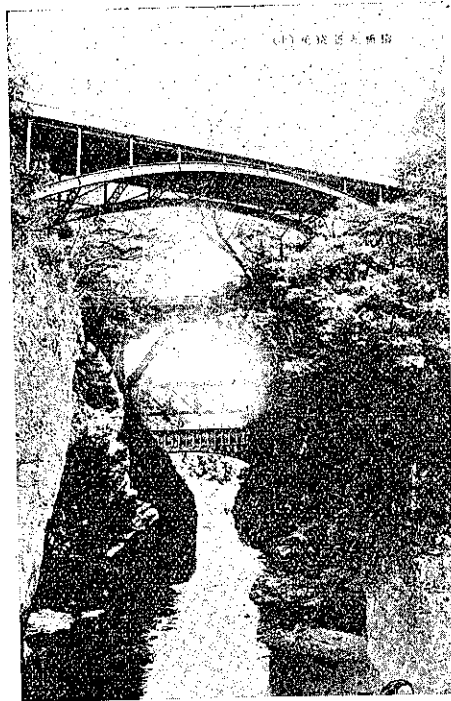
見よ、前方遙か白雪を戴ける富士の秀嶺は群山を壓して聳え、俯瞰すれば、畫尙暗き千仞の谷、あゝなんたる絶景ぞや、僅か5分の休憩時間を利用し、忙しくカメラファンの活動が開始された。筆者亦畫心大いに動き、拙技をスケッチブックに収める。お早くと車掌嬢の聲にせきたてられ、再び車上の人となり、うねうねと曲りくねつた急坂路を疾走する。鰻の寝床を示

す様な道路標識が、そこ、こゝに立てられてある。一度ハンドルを取り害へば奈落に顛落すべく、生命勿論保證の限りであるまいが、商賣柄とはいひ、運轉手君大型の自動車を操つて技倆仲々鮮かなものだ。車窓左手に清冽な桂川の流れが展開して一段の勝景を添へる。

10時25分吉野橋バス、10時40分、上野原にてガソリンの補給、11時25分、音に聞えし猿橋に到着、一同下車、奈良縣會議長、飯島土木課長、其の他知名の士のお出迎へと、御案内と、各種の繪葉書や案内書等の寄贈をうけ、暫次附近の絶景を觀賞する(第2圖並に第3圖参照)。第2圖中、上段は國道八號線新猿橋、

中段は甲州街道猿橋(文部大臣指定保存名勝)、下段は中央本線第二桂川鐵橋、最下段は東電の水路橋であり、第3圖は廣重畫くところの猿橋である。かくして、11時45分猿橋出發、見あかぬ奇景に意外の時間を費せしためス

第 2 圖



第 3 圖



ピードアツプが試みられた。0時5分、大月町バス、0時35分吉田町バス、折柄の陽光に照り映えた富嶽は愈々前方指呼の間に迫る。旅館、休憩所、登山用具賣店等軒を列べて居るのも登山町にふさわしい。0時45分河口湖ホテル別館に到着。

第 4 圖



少憩の後食堂に入り、用意されたる晝食と、飯島課長より御寄附の名産甲州葡萄と葡萄酒とに舌鼓打つ。同氏より御鄭重なる歓迎の際と、地況についての御説明あり。後湖畔にて一同記念撮影(第4圖參照)。1時4分同地出發、間も無く右手森々たる老杉に圍まれたる社あり。登山者の平安を祈る縣社淺間神社である。車中に遙拜し右手に富嶽を仰ぎ見ながち、美しき原始林の間を馳驅して山中湖へと急ぐ。2時15分山中湖到着、一旦下車、親しく附近の風景にみとれる。

河口、山中兩湖共湖底概ね淺く、鯉、鮒、鰻、鯰、ワカサギ等を産し、舟遊、スケート等に好適し、明媚なる湖畔の風光と相俟つて、キャンプに、別荘に利用され、大いに聲價を擧げて居るとの事である。富士の靈峯は、その嬋妍たる姿を之等湖上に寫し、所謂倒さ富士の名所を出現するのである。

今參考迄に五湖の湖廣表を摘記すれば次の様である。

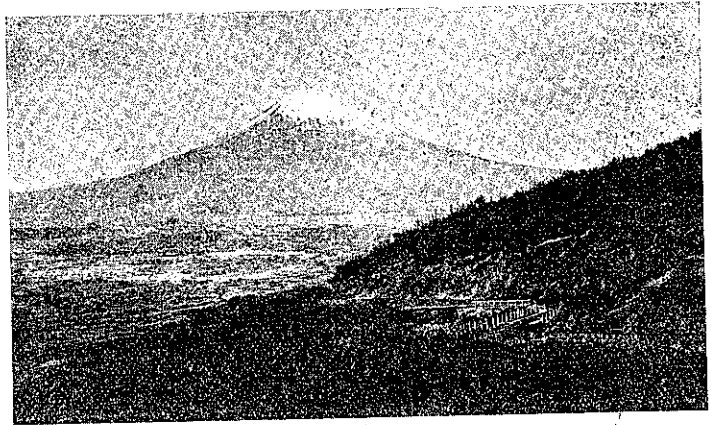
| 湖 名 | 湖岸線延長 (km) | 最 深 (m) | 海 拔 (m) |
|-----|------------|---------|---------|
| 山 中 | 12.93 | 16.0 | 982 |
| 河 口 | 19.95 | 21.8 | 832 |
| 西 | 10.58 | 90.9 | 903 |

| | | | | |
|---|---|-------|-------|-----|
| 精 | 進 | 5.09 | 25.5 | 903 |
| 本 | 栖 | 12.93 | 132.7 | 903 |

2時23分山中湖出發、車窓に富士を友とし、又亦快走を續ける。3時35分長尾峠(海拔903m)着、一同下車、この峠は、国道58號線上にあつて、隧道により山頂を横斷して居る。乙女峠と同じく富士の好展望臺の由、即ち頂上に立つて富士を望むに、白扇倒に懸けたる氣高き、美しき繪姿は、流石神國日本の表徴にふさわしい(第5圖参照)。折柄一片の白雲、飄然として山頂にかゝり、夕陽群山に映じて、えもいはれぬ景色となる。10分間の短い休憩ながら、感嘆久しふして後車上

第 5 圖

に納り、暮れぬ間の箱根の探勝へと急ぐ。此の頃より風少しく出で、山氣次第に膚にしみてうすら寒さを感じる。案内嬢は美聲をはり上げながら、あちこちの説明に忙しい。雄大なる眺望、國立公園の指定また宜べなる哉と感ぜしめられた。



右顧左眄、富士を背に、次々に展開される勝景を賞でながら、暮色迫れる中、紆餘曲折の急坂路を急ぐ。4時半、塔の澤環翠樓に到着。早速名湯に浸つて後三階廣場に開催された懇親會に臨む。美型の手踊りなどあり、歡を盡して7時歸路につく。歸路は東海道經由である。7時20分小田原バス、一日の快き疲れに、人々は次第にダンマリとなり、只ひたすらに走る車の音のみがあたりの静けさを破つて響く。併しこれも何時しか心地良きリズムと轉じ、そこ、こゝうたゞ寝を結ぶ者が出來て來た。街道は海邊に並行して走り、折柄の淡い月光をうけて海波白く、詩的な場面を見せる。7時50分平塚バス、街道筋の松並木が、ヘッドライトに照されて明滅する。胸中に大名行列の繪姿が浮ぶ。8時20分藤澤バス、この頃より小雨降り出で程ヶ谷通過の頃(8時30分)には本降りとなる。9時5分横濱バス、9時30分大森バス、このあたりよりこの地方在住の參加會員の途中下車を見る。かくして午後10時豫定通り東京驛着、解散、折から雨も霽れた。楽しき一日の清遊も終りを告げたのである。

尙此の日の參加會員は下記の諸氏である。

參加會員氏名 (アイウエオ順)

| | | | |
|------------|------------|------------|------------|
| 青 山 士君 | 上 野 有 芳君 | 内 田 黍 郎君 | 大 竹 邦 平君 |
| 岡 山 銀 次 郎君 | 岡 田 倍 治君 | 上 山 善 司君 | 河 瀬 元 治 郎君 |
| 神 原 信 一 郎君 | 北 澤 惇 夫君 | 久 保 田 敬 一君 | 櫻 木 四 月 彦君 |
| 末 松 榮君 | 田 口 俊 一君 | 立 神 弘 洋君 | 筒 井 丑 太 郎君 |
| 東 福 寺 正 雄君 | 永 田 民 也君 | 春 木 節 郎君 | 橋 口 行 彦君 |
| 古 川 淳 三君 | 細 野 芳 彦君 | 山 本 新 次 郎君 | 矢 野 善 治君 |
| 吉 田 耕 一君 | 中 倉 專 一 郎君 | 飯 島 馨 之 助君 | 田 邊 良 忠君 |

雑誌閲覽に就ての會告

別記の寄贈並に交換雑誌は本會事務所に備付置候間御希望の向は
下記時間内御隨意に御閲覽相成度候。

閲 覽 時 間

日曜日及祭日休、土曜日自午前9時至午後4時、其他自午前9時至午後8時。
但し役員會、委員會等開催の日は御斷り致すこと有之哉も計られず候間豫め御承知置被
下度候。

廣 告 料

| | | | | |
|------|------------------|------|------|-----|
| 普通廣告 | 1回1頁 | 35圓 | 1回半頁 | 20圓 |
| 指定廣告 | 裏表紙3面對向 及廣告初頁 | 1回1頁 | 40圓 | |
| | 裏表紙3面 | 1回1頁 | 70圓 | |
| | 色アート | 1回1頁 | 60圓 | |

- 指定廣告は凡て1箇年繼續申込のものに限り取扱ふものとす
- 會員自身の廣告に對して總て上記料金の割引とす
- 同一廣告の連續掲載申込に對しては1年4回以上1割引とす
- 廣告に寫眞版又は木版等を挿入する場合は之に要する實費を別に申受くるものとす

THE 20th ANNIVERSARY MEMORIAL NUMBER

DOBOKU-GAKKWAISHI.

(JOURNAL OF THE CIVIL ENGINEERING SOCIETY.)

VOL. XX, NO. 12, DECEMBER, 1934.

CONTENTS.

| | Page |
|---|------|
| Proceedings of the 20th Anniversary Memorial Meeting..... | 1 |
| Short History of Doboku-Gakkwai. | 1 |
| Presidential Address. | 1 |
| Keiichi KUBOTA: Civil Engineering in Civil Life. | 1385 |
| Addresses. | |
| Midori HARADA: On the Air Port..... | 1389 |
| Takatada NOSAKA: The Experiment of Landslide with Models made of Clay and Aga-aga. | 1415 |
| Gen SHIGEMATSU: Application of the Continuous Elastic Theory to the Analysis of Plane Rectangular Frames. | 1425 |
| Masashi HOMMA: Some Problems on the Non-uniform Steady Flow. | 1435 |
| Takeshi ITO: Hydrology on the River Tone..... | 1439 |
| Takeo SUMORI: Aerial Photography and its Application. | 1451 |
| Masayoshi NOGUCHI: Some Crust Deformations revealed by the Comparison of the new and old Precise Levellings. | 1459 |
| Hachiro SHIMADA: On the Law of Distribution of Asphalt Particles in Bituminous Emulsion. | 1467 |
| Yasuo KONDOW: On Cement Admixtures. | 1493 |
| Tokujiro YOSHIDA: On the Compressive Strength of Concrete of Dry Consistency. | 1507 |
| Jiuzo MASAKO: The Development of the Pneumatic Caisson in Japan. | 1519 |
| Koichi AKI: Some Problems on River Discharge Measurement. | 1525 |
| Chitsuryu WASHIO: On Reinforced-Concrete <i>Hijiri-Ushi</i> | 1533 |
| Midori SUGIURA: On the Cement Grouting for the Sand Layer of the Earth Dam Foundation. | 1539 |
| Eijiro ISHIKAWA: Hydro-Electric Power Development of the Kiso-River. | 1545 |
| Yunosuke HUDIWI: Some Private Opinions on the Gravity Dam. | 1549 |
| Motoki ONO: Roll fill Earthen Dam of Yamaguchi Impounding Reservoir, Tokyo Municipal Water Supply. | 1555 |
| Tomihisa IWASAKI: Some Notes of Slow Sand Filtration at Yodobasi, Tokyo W. W. | 1565 |
| Tokusaburo IKEDA: On the Disposal of Sewage Sludge. | 1583 |
| Teizo SIMANO: Protection of the Sea-Coast to the Wave Action. | 1619 |
| Toshibide KUWABARA: On the Harbour Works of Port Rashin. | 1623 |
| Masaki KANEKO: On Effect of Freezing of Subgrade Soil upon Pavements. | 1625 |
| Yasuhei EMORI: Investigation on Slipperiness of Various Road Surfaces. | 1643 |
| Tamotsu MACHIDA: On the Recent Tendency of Town Planning. | 1651 |
| Michikazu ISOGAI: On the Outline of the Reconstruction Work in Sanriku Region, des- troyed by Sea-shock on March 3, 1933. | 1657 |
| Gaiichi TOGASHI: On the Erection of Bansui-Bashi. | 1665 |
| Gonbei INABA: The Outline of Railway Bridge Erections in Recent Years. | 1671 |
| Suejiro TAKAHASHI: The Change of Tracks of Tokaido Main Line, Near Osaka, to the Eleva- ted New Position. | 1677 |
| Takane INOUE: Speed-up on the Japanese Government Railways, and Measures taken by Maintenance-of-Way Department in this Connection. | 1693 |
| Kyosuke YAMAZAKI: On the Concrete Road Bed in the Railway Tunnels in Japan. | 1719 |
| Yukihiko HASHIGUCHI: On the Cable Car Railways and Aerial Ropeways in Japan. | 1735 |
| Fukujiro HIRAYAMA: Some Problems in the Construction of Tanna Tunnel. | 1739 |
| Proceedings of the Society | 151 |

OFFICE

No. 6, 3-CHOME, MARUNOUCHI, KOJIMACHI-KU, TOKYO.